

2016年11月1日

みずほディーラーズアイ (2016年11月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 103.00 ~ 108.00

国際為替部 為替営業第二チーム 島田 貴章

■ 先月の為替相場

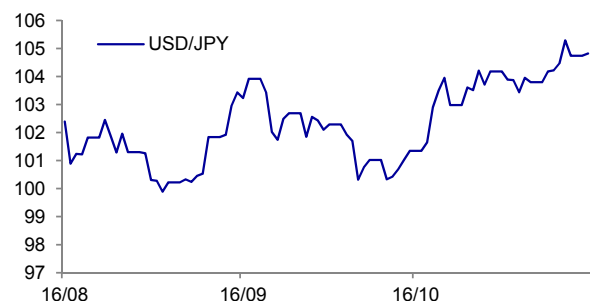
10月のドル/円相場は米金利上昇を背景に上昇する展開となった。月初3日、ドル/円相場は101円台半ばでオープン。月上旬は上昇する展開。3日発表の米9月ISM製造業景況指数や5日発表の米9月ISM非製造業景況指数などの好調な結果を受け、米長期金利とドル/円相場は共に上昇。ドル/円相場は日足一目均衡表の雲を上抜け、6日には104円台をつけた。7日、米9月雇用統計の冴えない結果を受け102円台まで下落。しかしながら週明け10日には堅調な欧州株式や原油先物を背景に、日足一目均衡表の雲上限を上回る103円台後半まで水準を戻した。月中旬は日足一目均衡表の雲上限水準(103.51円)を意識したレンジ推移。12日、FOMC議事要旨(9月20日～21日会合分)公表を前にタカ派の内容を警戒する動きから104円台半ばまで上昇。議事要旨には「複数のFED高官が利上げ時期が比較的近いと判断」などの内容が示されたものの、市場が期待していた12月FOMCでの利上げ乃至は2017年における複数回利上げにまで踏み込んだ内容ではなかったことから、104円台前半まで反落。13日、中国9月貿易統計における輸出/輸入双方での事前予想を下回る結果を受けリスクオフの展開となりドル/円相場は103円台半ばまで下落するも、更なる下落には繋がらなかった。19日、11月日銀金融政策決定会合における追加緩和見送りと観測報道を受け103円台前半まで下落するも反応は一時的。20日、米大統領選第3回TV討論会は第1回・第2回同様にクリントン候補優勢の結果となり、市場への影響は限定的となった。月下旬は再度上昇する展開。21日、白井前日銀審議委員の「日銀によるこれ以上のETF買い入れ拡大は困難」との発言が報道され103円台後半まで一時下落を見せた。24日には発表された米10月マークイット製造業PMIの良好な結果を受け104円台前半まで上昇。25日、カーニー英中銀(BOE)総裁が議会証言にて「ボンド下落によるインフレ上昇の許容にも限度がある」と言及。発言報道直後はボンド主導のボラタイルな動きの中でドル/円相場は下落。しかしながら翌日以降はグローバルに金利上昇が意識され欧米長期金利が上昇する動きにドル/円相場は反転上昇し、28日には月高値105.54円をつけた。しかしながらその後クリントン候補の私用メール問題について再調査との報道がなされ、一時104円台半ばまで下落。月末31日も104円台前半まで値を下げるも、その後は反転し104円台後半にて10月の取引を終えた。

■ 今月の見通し

今月のドル/円相場は、2016年内の米利上げを見据えた金利上昇および大統領選という重大イベント消化を材料に、底堅い推移を予想する。先ず米金融政策動向について、足許堅調な結果が目立つ米経済指標群や相次ぐFED高官のタカ派的発言により、12月FOMCにおける利上げの市場織り込みは9月末時点の50%前後から足許70%前後まで上昇している。FED高官の発言を読み解けば、FOMC内において2016年内の利上げを支持乃至は正当と考える勢力は多数派となっている情勢が見て取れ、米景気回復の頓挫が経済指標等によって明確に示されない限り、12月利上げは既定事項となりつつある。今後は経済指標を確認しつつ12月利上げに対する確信を強めるステージになると考えられ、「波乱無き経済指標の消化」はドル/円相場にとってサポート材料となるだろう。一方で、1日～2日に開催される11月FOMCでの利上げは見送られると予想する。11月会合における政策変更は、イエレンFRB議長、メスター・クリーブランド連銀総裁、エバンス・シカゴ連銀総裁、ラッカー・リッチモンド連銀総裁らが可能性について具体的に言及している。しかし、どちらかと言えば全ての会合において政策変更の自由度を確保するという一般的主張であると見受けられ、議長会合が予定されていない会合に敢えて利上げを実行する可能性はやはり低いであろう。11月FOMCは声明文および賛成票/反対票の状況から12月FOMCにおける利上げを再度市場に織り込ませるイベントとなると予想する。次に米大統領選について、一般有権者投票が11月8日にいよいよ実施される。先々月および先月に実施されたTV討論会は何れも民主党クリントン候補優勢の結果に終わったが、足許では同候補のアキレス腱である私用メール問題が再燃する状況となった。TV討論会で優勢を獲得したとはいえ、両候補共に支持獲得の決定打に欠ける中で支持率は拮抗しており、ここに来て不透明感が高まったといえる。本見通しにおいては、投票日当日における有権者の保守化を想定しクリントン候補の勝利をメインシナリオと置き、ドル/円相場がサポートされる展開を予想する。政策スタンスについてはクリントン候補もドル高忌避派であるが、「トランプリスク」と揶揄される同候補の不透明な政策方針対比ではリスクアセットはポジティブに反応するであろう。リスクオン相場となる中で、ドル/円相場はサポートされると予想する。以上を総括し、大統領選という不透明要素の払拭と12月FOMCにおける米利上げ確度上昇に伴い、ドル/円相場は底堅い展開となることを予想する。

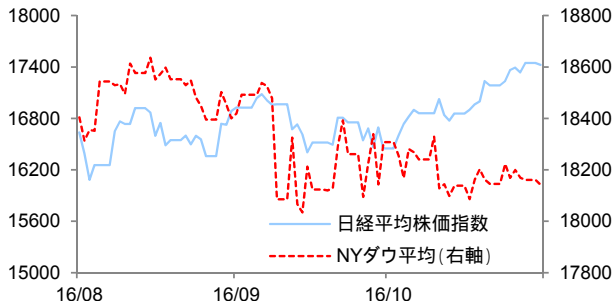
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/3	米ISM製造業景況指数	9月	50.4	51.5	49.4
10/5	米ISM非製造業景況指数	9月	53.0	57.1	51.4
10/7	米非農業部門雇用者数変化	9月	172K	156K	151K
10/7	米失業率	9月	4.9%	5.0%	4.9%
10/7	米平均時給(前月比)	9月	0.3%	0.2%	0.1%
10/14	米小売売上高(前月比)	9月	0.6%	0.6%	-0.3%
10/27	米耐久財受注(前月比)	9月	0.0%	-0.1%	0.1%
10/28	日全国CPI(前年比)	9月	-0.5%	-0.5%	-0.5%
10/28	日東京CPI(前年比)	10月	-0.4%	0.1%	-0.5%
10/28	米GDP(年率/前期比)	7-9月期	2.6%	2.9%	1.4%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ドル・ブル (5名、102.00～108.00、中心103.00～108.00)

藤崎	102.00 ～ 108.00	米大統領選は波乱なしと予想。FRBによる利上げ観測が残る一方、本邦からはM&Aや証券投資による外貨買いが継続し、引き続き円安方向への戻りを試す展開を予想。相場は概ね平価でレンジ取引を長期間継続したレベル。膠着感が強まる可能性も。
加藤	103.00 ～ 108.00	TPP交渉、米大統領選挙というイベントをこなし、本邦当局としては円安に対して必要以上に目くじらを立てる必要が無くなる。12月に想定される米国利上げに向けてゆっくりであれば円安は許容されることが再認識される月になるであろう。
高田	102.50 ～ 107.00	12月のFOMCまでは良好な米経済指標やFRB高官からのタカ派的な発言を背景とする利上げ期待の高まりから堅調なドル/円を予想。ただし市場では概ね12月の利上げを織り込んでおり、加えて米大統領選挙を控える状況下、大幅な上昇は難しだろう。
西谷	103.00 ～ 108.00	米大統領選に波乱がないことが前提であるが、米国の経済指標は良好な数字が続いている。マーケットでは12月利上げがコンセンサスとなりつつある中、実際に利上げを決定するまではドル堅調地合が継続すると思われる。
鶴田	103.00 ～ 107.00	12月の米FOMCを前に利上げ観測の拡大からドル買い優勢の展開を予想。11月のFOMCは据え置きとなり、米大統領選もクリントン氏の勝利となれば、足許の懸念材料は減少。そんな状況下、積極的にドルを売る材料は少なく、年内利上げに備えたドル買いを進める環境が整うだろう。

■ ドル・ベア (6名、100.00～106.50、中心101.00～106.00)

山下	100.00 ～ 106.00	クリントン大統領誕生・FRB12月利上げを市場は早い段階から過剰なまでに織り込んでおり、このイベントが予想通りの結果となったとしても、更なるドル買いが進むとは考えづらく、年初来のドル安円高トレンドに変更はない。
矢野	101.00 ～ 106.00	日銀金融政策決定会合、FOMC、米大統領選とイベントが続くものの、その結果にサプライズは想定せず。米利上げについては12月の観測が燦るも、マーケットは概ね織り込んでいることから同テーマによる上昇余地は限定的と見る。寧ろ、買われ過ぎからの反動による円高リスクに注意か。
佐藤	100.50 ～ 106.50	12月FOMCでの利上げは、概ね織り込みが完了したと思われ、ドル/円の上値余地は限定的と考える。10月にドルインデックスは大きく上昇しており、米製造業への悪影響が意識される中、事前予想を下回る経済指標にはドルの下値は脆弱で、下値リスクを警戒したい。
西島	101.00 ～ 106.50	年内米利上げ、米大統領選でのクリントン氏優位の情勢が相応に織り込まれてきた中でのドル高地合いは、イベント通過により巻き戻される可能性がある。まずは米大統領選の結果待ちながら、両候補ともにドル高回避のスタンスから、結果如何に関わらずドル/円を下押しする展開への備えが必要とみる。
下山	102.00 ～ 106.00	ドルインデックスが100を目前とする中、ドル高への警戒感は相応に強いだろう。米12月利上げ観測も市場で概ね織り込まれている印象であり、むしろ注意したいのはネガティブな材料によるこれまでのドル買いの巻き戻し。ドル円の上値は重く、下値に警戒したい。
森谷	101.00 ～ 106.00	12月利上げが既に相応に織り込まれていることを踏まえると、今月発表される指標が12月利上げを後押しする結果となってもドル/円の上昇幅は限定的となると予想。上昇局面では本邦輸出勢をはじめ、相応の売り意欲が見られると想定され、上値の重い推移を予想する。

ユーロ相場

予想レンジ:

EUR/USD 1.0605 ~ 1.1050
EUR/JPY 110.00 ~ 116.50

国際為替部 為替営業第二チーム 高田 裕

■ 先月の為替相場

先月のユーロは軟調な展開。

月初3日、対ドル1.12台前半でオープンしたユーロは、独大手銀行を巡る米司法省からの制裁金が減額されるとの観測などを背景に、ユーロは対ドル月高値1.1247をつけた。しかし上値は限定的で米9月ISM製造業景気指数の良好な結果を好感しドル買い優勢となると、翌4日には対ドル1.11台前半まで下落した。その後ECBが早期に量的緩和の縮小(テーパリング)を開始することを検討との一部報道に1.12台前半まで急回復すると、翌5日まで揉み合い推移。しかし6日にコンスタンシオ ECB 副総裁がテーパリングの報道を否定したことを受けてユーロ売りが強まると、対ドル1.11台前半まで下落した。翌7日は米9月雇用統計が市場予想比弱めの数字となったことを受けて、ドル売りが強まり1.12台まで上昇したが、米金利上昇とともにドルが買い戻されユーロは結局1.11台後半まで下落した。

翌週10日は東京、NY市場が休場となる中、ユーロは対ドル1.11台前半までじり安。翌11日にはEU単一市場へのアクセスを伴わない英国のEU離脱(Hard Brexit)懸念から債券が急落すると、対ドル1.10台半ばまで連れ安となった。その後12、13日も下げ止まらず、ユーロは心理的な節目とされる対ドル1.10ちょうどを割り込み1.09台後半まで値を下げた。その後は達成感から1.10台前半まで回復したが、週末14日は米9月小売売上高の良好な内容を受けてFRBの年内利上げ期待が高まると、ユーロは対ドル1.09台後半まで下落した。

翌週17日はユーロ圏9月消費者物価指数(HICP)の良好な結果を好感し、対ドル1.10台を回復。しかし18日に1.09台後半まで下落すると、19日は翌日にECB理事会を控えて、追加緩和期待からユーロ売り地合いとなり、対ドル1.09台半ばまで値を下げた。翌20日、ECB理事会で金融政策は据え置かれたが、理事会後のドラギ ECB 総裁の会見で量的緩和の延長については議論しなかったとの発言からユーロは1.10台前半まで急伸。しかし、テーパリングについては議論していないとのコメントや次回会合における追加緩和に含みを持たせたことが材料視されると、ユーロは反転し対ドル1.09台前半まで下落。週末21日も軟調推移し1.08台後半まで値を下げた。

翌週24日は1.08台後半で動意なく推移するも、25日はHard Brexit懸念や米地区連銀総裁からのタカ派的な発言から対ドル月安値1.0851まで下落した。その後値を戻すと、26から28日にかけてはじり高となり対ドル1.09台後半を回復し、翌週31日は1.09台で越月した。

■ 今月の見通し

今月のユーロは対ドルで上値の重い展開を予想する。

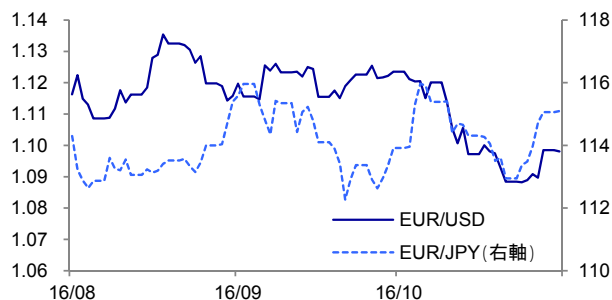
先月は、総じて良好な米経済指標やFRB高官からのタカ派的な発言を背景とする米利上げ期待の高まりから、ドルがユーロをはじめとする主要通貨に対して上昇した。加えてユーロについては、ECBが期限延長などの拡大資産購入プログラムのパラメータ修正を行い追加緩和姿勢を強めるとの観測や、Hard Brexitに対する懸念から、ユーロ売り優勢となっており、約7か月ぶりに対ドル1.08台半ばレベルまで下落した。

今月はECB理事会の開催予定はない。ユーロ圏の材料としては次回12月8日の会合に向けてECBによる追加緩和の蓋然性を推し量るべく、各種経済指標を睨む展開が予想される。指標の強弱に応じてユーロは上下するであろう。予定されているユーロ圏の経済指標としては、3日に9月失業率、7日に9月小売売上高、15日に7～9月期GDP(改定値)、17日に10月HICP(改定値)、30日に11月HICP(速報値)が挙げられる。特に17日と30日に発表予定のHICPについては注目したい。先月末に報じられた独10月消費者物価指数(CPI、速報値)は前年比で+0.7%上昇しており、2014年10月以来となる高い伸び率となった。ECBによる金融緩和策の効果が表れ始めていると考え得るものの、ユーロ圏10月HICP(速報値)は前年比+0.5%であり、ECBの目標である+2.0%を大きく下回る状況。仮に今回低調なHICPが確認された際には、ECBに対する追加緩和期待が高まり、ユーロは上値重く推移するであろう。またほかの指標についてもユーロ圏経済の力強さを欠く内容となれば、期待インフレ率の低下が意識されユーロ売りが優勢となる。そのほか、追加緩和を促す買入の規模や期間および対象資産に関するECB高官からの発言が報じられた際にもユーロは下値を探るであろう。

また、ユーロ圏外に目を向けると、足許の主要テーマは引き続き米金融政策であり、底堅い米経済指標からFRBへの利上げ期待を受けたドル買いが優勢となれば、ユーロは下落するであろう。但し、既に市場が織り込む12月利上げの確度は7～8割となっており、継続的な利上げについて確証が持てない状況下、ユーロの下値は限定的かも知れない。また、注目の米大統領選挙については、優勢とされるクリントン候補の私用メール問題など、投票結果に対する不透明感の高まりに応じて相場が乱高下することが懸念されるが、中期的な方向感としてはドル買いの巻き戻しから、ユーロがサポートされ得る可能性にも留意したい。

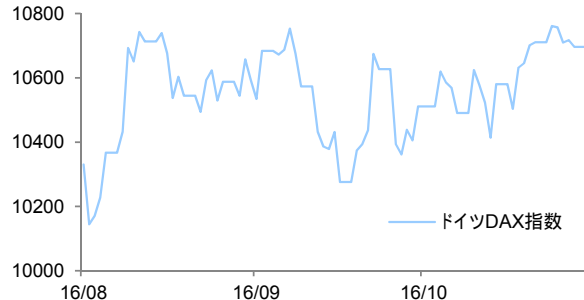
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/4 欧	PPI (前月比)	8月	▲0.1%	▲0.2%	0.1%
10/5 欧	小売売上高 (前月比)	8月	▲0.3%	▲0.1%	1.1%
10/11 独	ZEW調査 (期待)	10月	4.0	6.2	0.5
10/20 欧	ECB/預金ファシリテート	—	▲0.4%	▲0.4%	▲0.4%
10/21 欧	消費者信頼感	10月	▲8.0	▲8.0	▲8.2
10/24 欧	製造業PMI (速報値)	10月	52.7	53.3	52.6
10/25 独	IFO企業景況感指数	10月	109.6	110.5	109.5
10/28 独	CPI (前年同月比)	10月	0.8%	0.8%	0.7%
10/31 欧	CPI予想 (前年比)	10月	0.5%	0.5%	0.4%
10/31 欧	GDP (季調済/前期比)	3Q	0.3%	0.3%	0.3%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ・ブル (4名、1.0700～1.2000、中心1.0800～1.1300)

山下	1.0800 ～ 1.1200	懸念されていた欧州系銀行の決算も市場予想を上回る結果となり、ユーロ圏経済指標も低水準ながら安定している。今月で考えれば、ユーロを売り込む材料は見当たらない。FRB利上げも市場は織り込み済みで、更なるドル高つまりユーロ安は考えづらい。
佐藤	1.0850 ～ 1.2000	過度な金融緩和への弊害が指摘されるようになっており、ECBによる追加緩和期待は高まりにくい。一方、米利上げ期待は概ね織り込みが完了しており、金融政策格差拡大への連想は高まりにくく、ユーロは底堅い展開を予想する。
西島	1.0800 ～ 1.1300	ユーロ圏域内の低インフレへの懸念は熾るものの、Brexit決定後も経済動向そのものは底堅い景況感などに鑑み悲観的な向きの拡大は見られず。ECBテーパリング報道については一旦否定されているが、高官発言などからは緩和拡大ありきという規定路線からの反転もうかがえ、ユーロ相場を下支えしそう。
下山	1.0700 ～ 1.1300	追加緩和(ECB)から財政政策(各国政府)へと軸足を移したいとのECBの意向が感じられる中、世界最大の経常黒字を擁する通貨ユーロは底堅く推移しよう。また、ドルインデックスが100を目前とする中ではドル高警戒感も相応に強いと思われ、ドル売りを受けた相対的なユーロの上昇もありえよう。

■ ユーロ・ベア (7名、1.0450～1.1100、中心1.0600～1.1100)

藤崎	1.0500 ～ 1.1100	BREXITを巡る不透明感、ドイツ大手銀行経営不安、イタリア大手銀行の不良債権問題等からユーロの上値が重い展開を予想。FRBの年内利上げ観測は維持されており、米経済指標や大統領選で波乱なければ、ドル買い継続。テクニカルに1.05は相当堅い。
加藤	1.0450 ～ 1.1050	12月初めにイタリアでの国民投票を控えてユーロ圏における不安材料の払拭にはまだまだ相当の時間を必要とすると思われる。英国の方がよりリスクであることから、対英ポンドでは相対的に堅調推移と予想できるが、対他通貨では安心して買えない。
矢野	1.0600 ～ 1.1100	引き続きBREXITに対する思惑や欧州金融機関の経営不安は熾ったままとなっており、不透明感が台頭する中で積極的なユーロ買いは手控えられよう。また、米利上げ観測はある程度織り込み済みではあるものの、同要因もユーロの上値を押さえる材料となる。総じて上値の重い展開が継続すると予想。
高田	1.0650 ～ 1.1050	ECBによる追加緩和観測や底堅い経済指標に裏付けられた米利上げ期待からユーロは上値重く推移するであろう。
西谷	1.0600 ～ 1.1100	米大統領選に波乱がないことが前提であるものの、FRBによる12月利上げがコンセンサスとなりつつある中、ドル堅調地合は継続すると考えている。一方、ECBは12月の理事会においてQE延長を含めた追加緩和を決定すると見る向きは根強く、金融政策の方向性の違いによりユーロは下方向の展開を予想する。
森谷	1.0600 ～ 1.1100	BREXITや欧州金融機関の経営不安等、ユーロ圏経済の不透明感が強く意識されており、ユーロは積極的には買われづらいだろう。10月ECB理事会では今後の金融政策が引き続き緩和スタンスであることが示唆されており、こちらもユーロの上値を押さえる材料として意識されるだろう。
鶴田	1.0600 ～ 1.1050	ドル主導の相場展開からユーロは売られると予想。ドラギ総裁による金融緩和継続を示唆する発言を受け、テーパリング観測を巡る不安も後退し、欧州金融政策に落ち着きが見える。斯かる状況下、目先は年内米利上げ期待の高まりを背景としたドル買いからユーロ弱含みの展開を予想。

英ポンド相場

予想レンジ:

GBP/USD 1.2000 ~ 1.2700
GBP/JPY 127.00 ~ 135.00

欧州資金部 張 孝禎

■ 先月の為替相場

10月はHard Brexit懸念が広がる中、ポンド/ドルは一時1985年以来の最低水準まで急落。ポンド市場の動きはメイ英首相の発言・Brexitに関するニュースにセンシティブに反応し、ボラタイルな動きとなった。

月初、ポンド/ドルは1.2932レベルでオープン。しかし、保守党大会でのメイ英首相による「2017年3月末までにリスボン条約50条を発動し、EU離脱交渉において移民規制とEU法からの完全な独立を最優先する」といった演説内容を受け、英国がHard Brexitになると懸念が広がった。7日には31年ぶりの安値1.1144まで一時急落後、1.2432レベルまで回復しクロージング。

2週目のポンド/ドルは引き続き弱い動きとなり1.21台まで下落。14日に米商品取引委員会(CFTC)が発表したIMM通貨先物によると、非商業部門の投資家によるポンド売りポジションの拡大トレンドが継続し、引き続き歴史的に見ても高水準のショートが積みあがっていることを確認。

3週目に発表された9月英消費者物価指数は2014年11月以来の高水準となったが、市場の反応は限定的。しかし、「欧州連合(EU)から離脱する際、最終合意の議会批准が必要となる公算が非常に大きい」とのニュースを受け、ポンド/ドルは一時1.23台まで急上昇。しかし、21日、EU首脳会議終了後の記者会見でメイ首相からEUとの離脱交渉には「時間がかかる」との発言を受け、ポンド/ドルは1.22レベルを抜け1.21台後半まで下落。

月末週は、25日、英中銀総裁の上院での「インフレが目標を上回る状況を許容するには限度がある」との発言を受け、早期追加利下げ期待は後退し、26日には金利・ポンド両方とも上昇。27日に発表された英国7~9月期GDP(前期比)は予想+0.3%を上回る結果+0.5%となり、さらにポンド/ドルは上昇。しかし、7日に起こったフラッシュ・クラッシュから回復できず、9月の高値から10%安水準でクロージング。

■ 今月の見通し

11月は引き続きBrexit懸念と離脱交渉内容に市場参加者の注目が集まると思われる。また、12月14日の米FOMC政策金利発表前の動向に、市場の注目が高まり、ドル相場の影響を受ける可能性も十分あるだろう。今月の注目イベントとしては3日にBoE政策金利発表・インフレレポート、23日には英国の秋季予算編成方針が発表される。30日に開かれる石油輸出国機構(OPEC)総会も注目されるだろう。

先月の投機ポジションやテクニカル分析を見ると短期的にポンドは反発する可能性が十分あるものと思われる。一方、中長期的には、Brexit決定以降、予想より良好な経済指標が継続しているが、これから経済成長の減速兆候が出るとポンド/ドルはもう一段売られる可能性があるものと見られる。もし、ポンド/ドルが反発しても、Brexitへの不透明感から再度ポンド売りポジションが出やすい地合いでもあり、こうした状況が続く限りにはポンドの上値は重くなると予想。英消費者物価指数はポンド下落と原油価格の上昇が引き続きインフレ圧力となると予想される。しかし、英中銀はまだ利下げする余地があることを背景にハト的なスタンスを維持するものと思え、ポンドは上値重い展開が続くだろう。

ポンド上昇へのリスクとしてはHard BrexitからSoft Brexitへの離脱の方向性の転換姿勢、政府からの積極的な財政拡大出動、ポンド安のチャンスを活用するグローバルM&A等が考えられる。

テクニカル観点で見ると、ポンド/ドルは1.2090レベルがサポートされれば1.2445まで上昇する可能性があると考えられる。もし、1.2445レベルを超えると次のターゲットは1.2926となると見られる。逆に、1.2090レベルが抜けると10月7日の最低値1.144まで下落する可能性が高いと見られる。

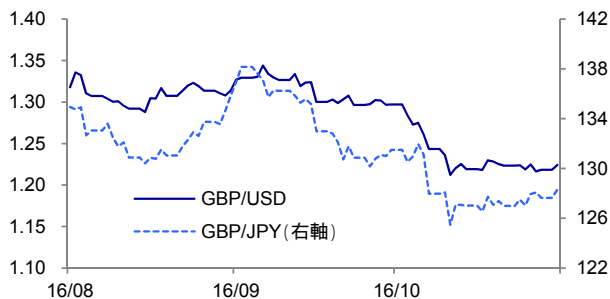
■ 今月のつづき(現地からの声)

『当地のファッション事情』

ロンドンのファッションといえばパンクファッションをすぐに思い出されると思うのですが、残念ながら世界中で質の均一化が叫ばれる昨今、ロンドンもご他聞にもれずファストファッションのショップが街中に溢れ、ロンドンの若者も基本的には日本の若者と同じような格好をしています。ロンドンにおいてもパンクファッションは絶滅危惧種になってしまったと言われています。しかし、パンクファッションは決して廃れたわけではありません。ロンドン中心地から地下鉄で北に10分ほど行ったところにある、パンクロックの聖地にして、パンクファッションの発祥地と言われるカムデンタウンには、パンクファッションを取扱うショップが未だに数多く立ち並んでおり、それに合わせてパンクファッションに欠かすことの出来ないタトゥーやピアスのお店も所狭しと並んでいます。そのため、とても奇抜な(写真でお見せできないのが残念なほど)パンクファッションに身を包んだイギリス人をそこかしこで見ることが出来ます。しかも、そんな奇抜で目を引く格好をしているのが若者だけではないのもカムデンタウンならではの魅力だと思います。明らかに50歳を過ぎたぽっちゃり系のおじさんが冬なのにトゲトゲだらけの皮のベストのみを着て黄色と黒のタイトパンツを穿いたり、ピンク色のモヒカンで揃えた親子が近所のスーパーマーケットにいたり、年齢、性別ともに実に多彩です。先日、日曜日にカムデンマーケットで昼食を買っていると、隣では全身真っ黒のシド・アンド・ナンシー風カップルが中華弁当をお持ち帰りしていました。ちなみに、カムデンタウンはゴスファッションでも有名です。

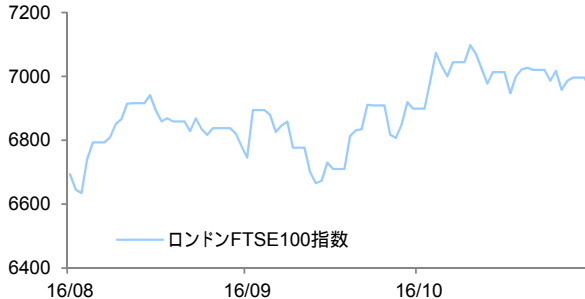
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/3	製造業PMI	9月	52.1	55.4	53.4
10/4	建設業PMI	9月	49.0	52.3	49.2
10/5	サービス業PMI	9月	52.2	52.6	52.9
10/7	鉱工業生産(前年比)	8月	1.3%	0.7%	2.1%
10/7	製造業生産(前年比)	8月	0.8%	0.5%	0.7%
10/18	消費者物価指数(前年比)	9月	0.9%	1.0%	0.6%
10/19	ILO失業率	3Q	4.9%	4.9%	4.9%
10/20	小売売上高(含自動車/前年比)	9月	4.7%	4.1%	6.6%
10/27	GDP(QoQ)	3Q	0.3%	0.5%	0.7%

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.7475 ~ 0.7750
AUD/JPY 77.00 ~ 81.50

シドニー支店 山口 美紀

■ 先月の為替相場

10月の豪ドルは0.75～0.77を中心に揉み合い推移。

3日、豪ドルは0.76半ばでスタート。4日、豪準備銀行(RBA)理事会にて、市場予想通り政策金利は据え置かれ、豪ドルへの影響は限定的。6日、米新規失業保険申請件数が良好な結果となり、米ドル買いが入り、豪ドルは一時0.75後半に下落。翌日、米9月雇用統計は市場予想を下回る結果となったものの、12月の利上げを十分サポートする内容となり、豪ドルは0.75半ばまで軟化した。翌週に入り、豪ドルは0.75台を中心に揉み合い推移していたが、13日、中国9月貿易収支が低調だったこと(特に輸出の大幅減)を受けて、豪ドルは安値0.7506まで値を下げた。しかし、0.75はブレイクせず、豪ドルは次第に0.75後半に反発。

14日、中国9月消費者物価指数や9月生産者物価指数が予想比上振れ、豪ドルは0.76を回復した。翌週に入り、18日、ロウRBA総裁の「現在の豪ドルと金利は経済にとって望ましい水準」との発言を受けて、豪ドルは0.76半ばまで上伸。同日のRBA議事録では、追加利下げに関するヒントが示されず、豪ドルは同水準をキープして推移。翌日、中国主要経済指標(7～9月期GDP/9月小売売上高/9月鉱工業生産/9月固定資産投資)が発表されるが、ほぼ予想通りの結果となり、豪ドルは0.76後半で揉み合い。その後、米9月住宅着工件数が冴えない結果となり、豪ドルは0.77台に上昇。20日、前日の豪ドル高の流れが継続し、豪ドルは一時高値0.7735を付けるも、豪9月雇用統計の雇用者数が▲9.8千人減少(予想+15.0千人増加)となり、豪ドルは0.76前半に反落。26日、注目の豪7～9月期消費者物価指数(CPI)は前年比+1.3%と予想同+1.1%を上回り、豪ドルは0.77台に浮上するも、海外市場で良好な米経済指標を受けて米ドル買いが優勢となり、豪ドルは0.76台に反落。その後も米ドル買い優勢が続き、豪ドルは0.75後半まで値を下げた。

■ 今月の見通し

「1日(火)のRBA理事会での利下げ有無及び声明文に注目。」

先月発表された豪州インフレ指標は、RBAのインフレーターゲット(+2～3%)を下回る結果となったものの、予想前年比+1.1%を上回る同+1.3%となり、更にRBAが政策運営で注視する基調インフレ率(=(トリム平均値+加重中央値)÷2)は+1.5%と8月発表されたRBA四半期金融政策のインフレ見通しと一致する。また、ロウRBA総裁は、9月の議会証言にて「近年は政策金利の引き下げ効果が減退している」、10月の講演時質疑応答にて「現在の豪ドルと金利は経済にとって望ましい水準」と発言しており、RBAは追加利下げを急いでいないと思われ、追加利下げは早くても次回インフレ指標発表(2017年1月末)後と考える。

一方、米国では、9月FOMC声明文にて「利上げ環境が整いつつも、確証が取れるまで当面待つ」と書かれていた。11月8日に米大統領選を控えていることを勘案すると、11月1～2日のFOMCでの利上げは見送られるだろう。むしろ、12月FOMCでの利上げを控えて、11月FOMCの声明文が変更される可能性が高く、声明文の変更内容に注目が集まる。

テクニカル的には、日足チャートの200日長期移動平均線0.7475がサポートライン、ここ3か月押さえられている0.77半ば(8月高値0.7760、9月高値0.7732、10月高値0.7735)をレジスタンスラインと見る。

追加緩和観測後退の豪州(豪ドル買い)と利上げ準備をする米国(米ドル買い)の思惑が交錯し、方向感出にくく、豪ドルは0.74後半～0.77半ばを中心とした揉み合い相場となろう。

11月の豪州注目指標は、RBA理事会(1日)、9月貿易収支(3日)、9月小売売上高(4日)、RBA議事録(15日)、10月雇用統計(17日)。7～9月期民間設備投資(24日)。また、11月8日の米大統領選の行方も注目。

■ 今月のつづき(現地からの声)

『当地のファッション事情』

公共放送ABCによると、オーストラリア人は衣料品や靴に毎年平均2,288豪ドル(約18万円)を支出しているそうです。シドニー大学の教授も「オーストラリア人が購入する衣料品は過去20年間で約2倍になった」と、オーストラリアでもオシャレ拡大の動きが見られます。

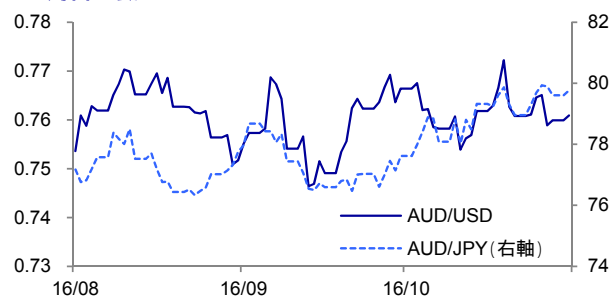
オーストラリアのファッションの代表はビーチサンダルと思っています。街中にビーチサンダルの自動販売機があるのもオーストラリアならではのしょうか？ただ、元々はビーチサンダルは日本発祥(!?)。鼻緒の付いた日本独自の履物『草履』がビーチサンダルに進化したと言われています。

さて、チームメンバーにビーチサンダルを何足持っているか聞いてみました。「オーストラリア人の平均は3足かな？しかし、だいたい1足は壊れている。」とのややユニークな回答。また、「ビーチサンダルを室内スリッパ代わりに。更に、シチュエーションに合わせて使い分けている。」と言い、10足以上持っている強者もいました。私もビーチサンダルは3足持っているので、平均的なオーストラリア人の仲間入りができました。

また、ビーチサンダル同様に人気なのは、裸足スタイルです。ビーチ以外にも、Cityでもたまに裸足の方を見かけます。ディーリングルームの床が絨毯ということもあり、靴を脱いで(靴下で)仕事をしているチームメンバーもいます。一方、私は、デスクの下に通勤用・社内用・夜用(!?)の3足の靴を置いています。多過ぎじゃないか？って、そんなことはないですよ。だって、オシャレは足元から！

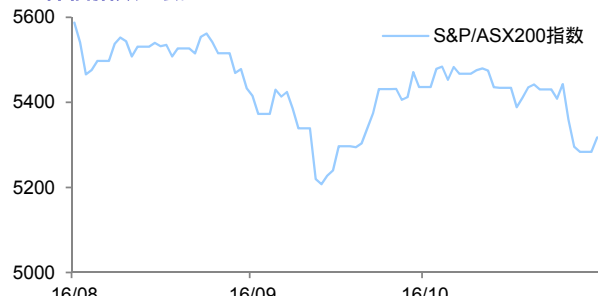
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/4	RBAキャッシュレート		1.50%	1.50%	1.50%
10/5	小売売上高	8月	0.2%	0.4%	0.0%
10/6	貿易収支	8月	▲2300M	▲2010M	▲2121M
10/18	RBA議事録				
10/20	雇用者数変化	9月	15.0千人	▲9.8千人	▲8.6千人
10/20	失業率	9月	5.7%	5.6%	5.7%
10/26	CPI[前期比/前年比]	7-9月	0.5%/1.1%	0.7%/1.3%	0.4%/1.0%
10/26	CPIトリム平均[前期比/前年比]	7-9月	0.4%/1.7%	0.4%/1.7%	0.5%/1.7%
10/26	CPI加重平均[前期比/前年比]	7-9月	0.4%/1.4%	0.3%/1.3%	0.5%/1.5%

カナダドル相場

予想レンジ: USD/CAD 1.3140 ~ 1.3580
CAD/JPY 76.60 ~ 79.20

米州資金部 光野 由貴宏

■ 先月の為替相場

月初は1.3130でオープン。発表された米9月ISM非製造業景気指数(総合)が予想を大きく上回るとドル買いが優勢となり1.3230まで上昇。その後も年末の米利上げを背景に主軸通貨に対してドル買いが進み、1.3300まで上昇。

月中はNY市場が休場で流動性に欠ける中、ドル/カナダドルは1.3140まで下落。ハードブレグジット懸念でユーロ、ポンドに対してドル買いが強まったことや、FRBページブックの発表を控え1.3273まで上昇。しかし露プーチン大統領が“ロシアとしても増産凍結もしくは減産の用意はある”との発言を受けWTI原油が\$51付近での高水準での推移となったことや、ページブックからは特段目新しいドル買い材料が無かったことから1.3210まで反落。その後は米10年債利回りの上昇を受けてドル買いが強まるとドル/カナダドルは1.3307まで上昇。しかしテクニカルレジスタンスでもある1.33100付近では売り意欲も強く、米9月小売は横ばい、10月ミシガン大学消費者マインドが予想を下回るとドル売りが強まり、一時1.3103まで下落した。

月後半にかけてはカナダドルが売られる展開。発表された米10月ニューヨーク連銀製造業景気指数、9月CPI除食品・エネルギー(前月比)が予想を下回ると1.3055まで下落。19日に行われたカナダ中銀金融政策決定会合では、下がるかと思われていた一部の予想に反し主要金利が据え置きとなったことや、堅調な原油相場を受けて、ドル/カナダドルは月安値の1.3006まで下落。しかし、その後行われたカナダ中銀ボロス総裁の会見では“輸出水準は期待値を大きく下回っている”、“追加緩和について積極的に話した”とハト派な発言を受けてカナダドルが売り戻されると、1.3142まで急反発。その後もカナダドル売りが優勢となる中、21日に発表されたカナダ8月小売売上高(前月比)、9月消費者物価指数が予想を下回ると、ドル/カナダドルは1.3355まで急伸した。

月末は、じり高の推移に一時1.3433まで上昇し、3ヶ月ぶりの1.34台となる1.3409でクローズした。

■ 今月の見通し

今月のドル/カナダドルは堅調な推移を予想する。先月行われたカナダ中銀会合では、政策金利は据え置きとなったが、冴えないカナダ経済指標を受け、ボロス総裁の年内の利下げも視野に入れたハト派な発言が意識されることで、カナダドルは弱含むであろう。次に、9月のOPEC会合における減産合意について具体的な内容が不透明なこともあり、また未だに減産する国が決まっていないことから、原油相場は軟調となり、コモディティ通貨のカナダドルにとってマイナス要因となるであろう。また、米大統領選挙、ハードブレグジットなどの政治的観点からのネガティブサプライズによるボラティリティの上昇にも注意しておきたい。

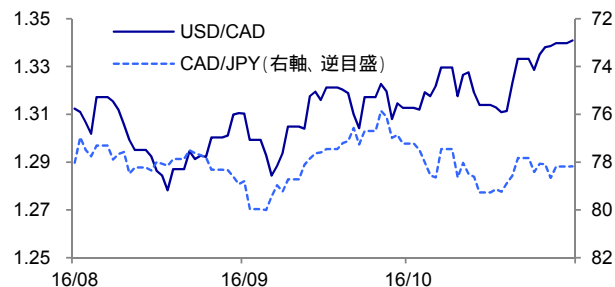
一方で米ドルはカナダドルを含む主要通貨に対し堅調な推移を予想。注目されているFOMC利上げはフェドファンド先物で見ても70%以上織り込まれており、市場では12月会合で利上げするとの見方が強まっている。金利差の観点から、欧州・日本のマイナス金利、またカナダ中銀も利下げを検討していることから、唯一運用して金利が稼げるドルに資金が集まる可能性は高いであろう。

■ 今月のつづき(現地からの声)

『当地のファッション事情』
カナダを含む北米の人はファッションに比較的無頓着というか…スタイルはとてもシンプルです。プライベートではボトムスは1年通して大体ジーンズ、トップは季節によりTシャツ又はスウェットパーカーというコーディネートが圧倒的に多い様に思います。あと若い女性はヨガパンツ姿でお出かけしている光景もよく目にします。もちろん、なかには色使いが上手でお洒落なヒップスターやGQスタイルモデルの様な装いをした人達もいるのですが、少なくとも私の周りの友人の80%は前者で、こちらに来たばかりの頃は外出の際に日本の感覚でスカートや特にワンピース等を着たりすると、「ドレスアップして、パーティーにでも行くの?」と彼らに言われることがしばしばありました。ある時は、「君の着ている服に合わせられるようなおしゃれな服を僕は持っていない」と付き合ってた人に言われ、仕方なくジーンズに穿き替えたこともありました。
冬が長く厳しいカナダでは、特に冬場は見た目よりも機能性、実用性のある服が重宝される傾向にあります。日本の冬に良く見られるウール、アンゴラ、カシミア素材のコートは見目麗しくもマイナス15-20度の寒空の中では寒すぎて、マトリョーシカばりに中に沢山着込まないと使え物になりません。よってこちらで好まれる冬ジャケットは、雪対策としてアウターがテフロン加工された高撥水仕様で、インナーが軽くて暖かいダウン素材のものが多くです。安くははありませんが、Arc'teryxやNorthFace、Columbiaなどのアウトドアブランドの冬ジャケットを1つ持っているとかカナダの冬は一段と過ごしやすくなります。近年は機能性とデザイン性を兼ね備えたCanada Gooseのジャケットが国内外で人気上昇中です。一昨年の冬に東京へ帰省した際に何人か着ている人を見ましたが、さすがに東京の冬にCanada Gooseは少しオーバーだろ!とつづいたくなりました。(カナダ支店: 那須絃子)

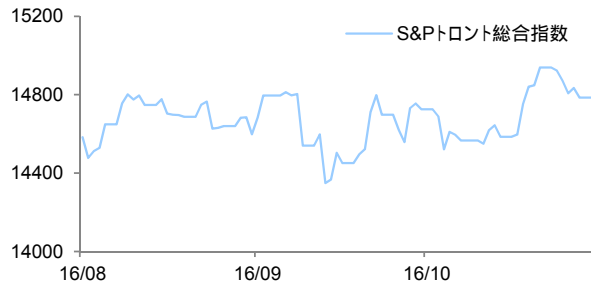
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/3	RBCカナダ製造業PMI	9月		50.3	51.1
10/7	失業率	9月	7.00%	7.0%	7.00%
10/7	雇用ネット変化率	9月	7.5k	67.2k	26.2k
10/11	住宅着工件数	9月	190.0k	220.6k	184.1k
10/19	カナダ銀行翌日物貸出金利		0.50%	0.50%	0.50%
10/21	小売売上高 (前月比)	8月	0.3%	-0.1%	-0.2%
10/21	消費者物価指数 (前月比)	9月	1.4%	1.3%	1.1%

韓国ウォン相場

予想レンジ:

USD/KRW	1110	~	1170
KRW/JPY	8.93	~	9.39
JPY/KRW	10.65	~	11.20

(注)100韓国ウォンあたりの対円レート

ソウル資金室 山口 智裕

■ 先月の為替相場

10月のドル/ウォンは、5か月ぶりに反発。月を通じて上げ幅を拡大した。

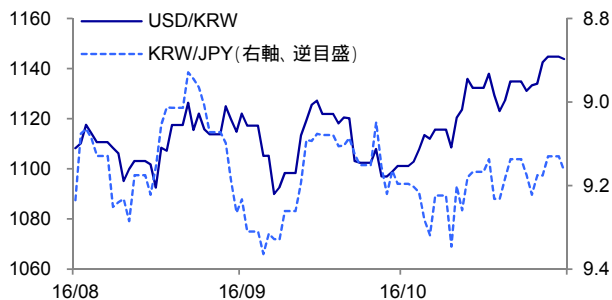
月初旬のドル/ウォンは上昇。連休中の海外市場で、米9月ISM製造業景気指数が市場予想をうわまわったことやドイツ大手銀行に対するポジティブなヘッドラインを受けて、ドルが上昇する中、連休明け4日のドル/ウォンは1103.0で取引を開始後、月安値となる1102.2をつけた。同日の欧州時間には「ECBが量的緩和と縮小の必要性で合意に達しつつある」との一部報道(ECBが後に否定)を受けて、金融引締め観測が高まったことなどからドルが一段と上昇、雇用統計を前にドル/ウォンは9月FOMC前の1117台まで上昇した。

月中旬のドル/ウォンは上昇。米9月雇用統計がやや低調な結果となったことを受けて、10日のドル/ウォンは一旦下落したものの、11日は韓国大手電子機器メーカーが新製品の生産停止を発表したことや、ドル/人民元が今年7月の高値を上回って推移したことを受けて、ドル/ウォンが上昇。その後もFOMC議事要旨がややタカ派的と受け止められたことや、中国の9月貿易統計が市場予想を下回る低調な結果となったことを受けて、ドルの上昇基調が継続し、ドル/ウォンは17日に1143.6まで上昇し、今年7月以来の水準まで上昇した。しかし、その後は米9月コア消費者物価など米国の経済指標が総じて振るわない結果となったことや、中国の中央委員会第6回総会の開催を前にインフラ投資への期待感から中国株式市場が堅調に推移したことを受けて、ドル/ウォンは上げ幅を縮小。

月下旬のドル/ウォンは上昇。20日、ECB理事会後のドラギECB総裁の記者会見では、「量的緩和(QE)延長は議論していない」としつつ、「テーパリングについても議論していない」と説明。アジア通貨が底堅く推移する場面も見られたが、各種経済指標が堅調な結果となる中、28日に発表される米7~9月GDP速報値の上振れ観測が高まり米金利が上昇したことを受けて、ドル/ウォンは上げ幅を拡大。28日に発表された米7~9月期GDPのヘッドラインが市場予想を上回ったことを受けて、ドル/ウォンは31日の朝方に、月高値となる前月末比+50.1ウォン安の1148.9まで上昇。ただし、その後は月末のウォン買いや米FBIのクリントン米大統領候補の電子メール問題の捜査再開報道などを受けて、ドル/ウォンは上げ幅を縮小し、1144.5で引けた。

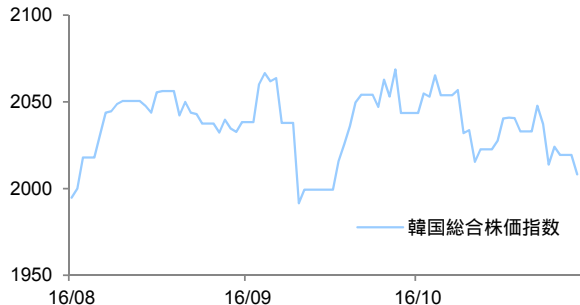
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 今月のつづき(現地からの声)

『当地のファッション事情』

日本の最近のファッションも分かっていない私が韓国のファッションを語っていいのかと思いつつ、見解を述べさせていただきます。

日本だとカジュアル系、コンサバ系、モード系、お兄/お姉系、ストリート系など適当に思いっくだけでも様々なファッションの系統があり、多様化されておりますが、韓国ではそういった系統がほとんどなく、フンナム/フンニョという、社会通念上の良しとされる理想像を皆が世代毎になんとか共有しており、お洒落とはそれを目指すことという感じです。なので、日本人がソウルの街中を歩くと、皆同じ様な格好をしているように見え、大学生の多い街に訪れたとしても、傾いた格好をしている人を見るのは稀です。

フンナム/フンニョに話を戻しますと、フンフンハンナムジャ/ヨジャの略で、直訳すると温かい男性/女性という意味ですが、どちらも超イケメン、超美人まではいかないものの「いい感じの」男女ということのようです。

具体的には、男性であれば背が高い、やさしいなど外見、性格のほか、ファッションについては、綺麗めでシンプルなスタイルが好まれ、所謂レイヤードのような着こなしは敬遠されます。

女性に関しては、髪はセミロングで、所謂K-POPのようなスタイリッシュでキレイ系が良しとされており、プリプリしたかわいい系は社会通念的にあまりよろしくないと考えられます。

ユニセックスという概念自体があまりなさそうですが、メガネをするのであれば、男女ともに明治時代のような丸眼鏡が推奨され、角ばったものは受けが悪いようです。また、ギャル/ギャル男やサーファー系寄りの見た目、格好は、ちょっと変わった人か日本オタクだと見られやすいようです。

■ 先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/1	輸出(前年比)	Sep	-4.20%	-5.90%	2.60%
10/1	輸入(前年比)	Sep	-2.70%	-2.30%	0.10%
10/5	消費者物価指数(前年比)	Sep	0.70%	1.20%	0.40%
10/12	失業率(季調済)	Sep	3.80%	4.00%	3.80%
10/13	韓国銀行7日間レート		1.25%	1.25%	1.25%
10/25	GDP(前年比)	3Q P	2.60%	2.70%	3.30%
10/26	消費者信頼感	Oct	--	101.9	101.7
10/31	鉱工業生産(前年比)	Sep	-1.10%	-2.00%	2.30%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 31.00 ~ 32.00
TWD/JPY 3.22 ~ 3.48

台北資金室 辻野 順治

■ 先月の為替相場

10月のドル/台湾ドル相場は、上旬は、9月の台湾中銀による政策金利据え置きもあり、台湾ドル高圧力が残る展開となったが、米年内利上げ期待、ユーロやボンド下落を受けた相対的なドル高により、小幅台湾ドル安となった。

10月のドル/台湾ドル相場は、31.30台半ばでオープン。3～5日は、米9月ISM製造業景況指数が強い結果となったことなどを材料に、ドル高となるも、台湾株式市場への資金流入や台湾中銀の政策スタンスが意識され、台湾ドル安方向への動きは見られず、31.30台で一進一退。6,7日は、先日から韓国ウォン安に加え、人民元安も進み始めたことや、ユーロ下落に伴うドルインデックス上昇もあり、31.40台へ台湾ドル安となった。

米9月雇用統計明けの10日は祝日より休場。11日は、米9月雇用統計は市場予想を下回る結果となったものの、年内利上げ観測が根強く、ドルが堅調に推移していたことや、国慶節明けの人民元の一段安もあり、31.60台半ばまで台湾ドル安が進行。13日は、一段の韓国ウォン安や人民元安に連動し、31.70台へ。17日には、ユーロ安やボンド安を受けた相対的なドル高により31.80台まで台湾ドル安が進んだ。但し、18日には、ドルインデックスの下落を受け、31.70台へ反発。さらに19日には、ボンドの急上昇しか材料は無かったものの、31.40台まで大幅台湾ドル高となった。外国人投資家資金流入額も特別に大きな金額だったわけでもなく、韓国ウォンや人民元も横ばいだったことから違和感のある動きとなった。

19日以降、18日の急な動きは、修正され、20日には31.50台へ。また、一段のユーロ安によるドルインデックス上昇が意識され、21日には31.60台へ台湾ドル安が進んだ。但し、ボンド安、ユーロ安も一服感が見られる中、24日～28日は、31.50台後半から31.70付近までのレンジで一進一退が続く。11月初めのFOMCや米経済統計待ちの展開。31日は、クリントン氏のメール問題が再燃したことが嫌気されたドル安に連動し、31.50台での取引となった。

■ 今月の見通し

11月のドル/台湾ドル相場は、一進一退の展開を見込む。

台湾9月経済指標は、8月と比べると、鉱工業生産、輸出受注は鈍化の兆しが出てきている。元々、半導体が特に好調という中で、新型携帯電話の発売以降は、やや鈍化していることが背景と見られる。7～9月期GDPは、前年同期比+2.06%と市場予想を上回る結果となったが、先行きへの楽観ムードは見られない状況だ。また株式市場では加権指数が年初来高値を更新する一方で、外国人投資家資金は、6～8月の月間平均1,066億台湾ドルの流入に対し、9月は25億台湾ドルの流入と大きく減少し、10月には19億台湾ドルの流出に転じている。

今月の台湾ドル相場は、引き続きドル次第の状況が続く見込み。米年内利上げが今月の米統計により固まってくる可能性もあるが、再度、米10月雇用統計が期待外れに終わった場合は、調整も見られるだろう。一方で、ユーロやボンド安がドルの相対的な価値を押し上げており、米利上げ観測だけでは見通しがしにくい状況。また、米MMF規制により上昇した短期金利が全期間に渡って、米金利を押し上げており、米金利の高さも、相対的なドル選好を高めている印象だ。このような状況では、台湾だけでなく、米国の材料について検討してみても、方向感が見極めにくく、思わぬ動きに注意が必要だろう。但し、間接的な要因で動く中では、一方向に動き続けるという展開も想定しがたい。また米利上げが決定的になってきた場合も、来年以降の緩やかな利上げスタンスが強調されるなど、バランスの取れた姿勢が確認出来れば、ドル高も頭打ちになると見られ、一進一退が続くだろう。

台湾に関する材料としては、9月に据え置きを決めた政策金利を12月に引き上げるというのは時期尚早。据え置きしたこと自体で台湾ドル高圧力が強まった印象であり、台湾ドル高覚悟の上で景気過熱を抑えるような状況でもない。1年物の金利スワップの水準を見ても、3か月TAIBOR比、僅かに高いという程度で、市場の見込みも同様だ。一方で、5年程度の金利は、ドル金利に連動しながら、上昇が続いており、中長期金利ではやや先走った動きが見られている。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

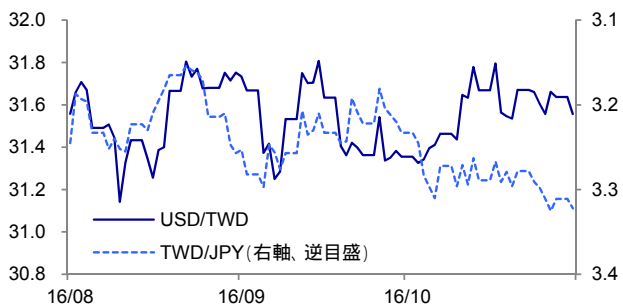
『当地のファッション事情』
10年ほど前に台湾に遊びに来たことがありますが、その時の印象は女性のファッションは、日本とほぼ同じ、男性がやや冴えないという印象でした。そして4年ほど前から赴任していますが、若い男性はレベルが高くなってきた印象があります。特に髪型は、個性的なものも含め、おしゃれな感じですよ。

女性に関しては、あくまで個人的な印象ですが、韓流を感じるメイクや衣類が増えているような気がします。確かに衣類の卸問屋街(一部、小売もやっている。)へ行くと、若い女性向けの衣類のタグはハングル文字だったりするので、本場の品が流通しているようです。

但し、街にいるすべての人がおしゃれな感じではなく、色んな人がいます。化粧をしない人はもちろん、部屋着のような格好でレストランで食べていたりという具合です。こういうところが、慣れてくると、台湾の良さなのかなと感じます。

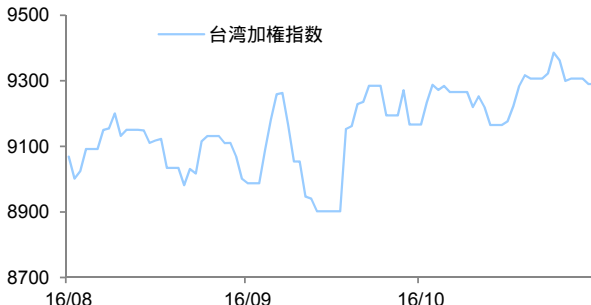
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/5	CPI(前年比)	9月	0.40%	0.33%	0.57%
10/7	輸出(前年比)	9月	2.80%	-1.80%	1.00%
10/7	輸入(前年比)	9月	8.00%	0.70%	-0.80%
10/20	輸出受注(前年比)	9月	2.00%	3.90%	8.30%
10/24	失業率	9月	4.00%	3.93%	3.95%
10/24	鉱工業生産(前年比)	9月	5.00%	5.02%	7.74%
10/31	GDP(前年比)	3Q	1.80%	2.06%	0.70%

(資料) ブルームバーク

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.7500 ~ 7.7650
HKD/JPY 13.27 ~ 13.80

香港資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【10月の香港ドル直物相場】

米ドル/香港ドルは概ね7.755から7.760の狭いレンジで推移した。売り要因と買い要因が並び立ち、相場への影響を相殺したため。すなわち、米利上げ期待の高まりから米ドル指数が9か月ぶりの高水準となるなど、米ドル買い香港ドル売り圧力がかかるも、一方で中国本土からの大規模な資金が香港の株式市場と不動産市場に流入し続けたことで、香港ドルを下支えた。米ドル/香港ドルフォワードポイント1年物は、▲125ポイントから▲193ポイントと限定的なレンジ内推移となった。背景として10月中旬の米MMF規制強化実施後に米ドルLIBOR3か月物が0.88%程度で高止まるも、そこから大きく上昇しなかったことが挙げられる。

【10月の香港ドル金利市場】

指標金利である香港ドルHIBOR3か月物は年末越えの香港ドル資金需要、米ドルLIBORの上昇、米12月利上げの織り込みといった要因から、0.6%程度まで上昇した。インターバンク市場における流動性を図る指標である香港金融管理局(HKMA)の当座預金残高は2,600億香港ドルと、先月から横ばいで推移。為替基金証券の発行ペースが鈍化していることから、HKMAが香港ドルの十分な流動性と低金利を維持しようとしていることが読み取れる。他では、米ドルLIBOR3か月物が米MMF規制強化実施後に7年ぶりの高水準である0.88%に達したが、金利上昇には一服感が見られる。そのため、香港ドルHIBORと米ドルLIBORの金利差は▲0.27%程度と僅かな拡大に止まっている。なお、多くの起債に伴って香港ドル金利スワップ市場が活性化しており、5年物は9月末に1.13%だったのが10月には1.31%まで上昇した。

【10月の香港株式市場】

ハンセン指数は24,000の壁を突破できず、中国本土からの資金流入が株式市場だけでみると先月より鈍化したことが株価の調整につながった。人民元SDRバスケット構成通貨入り後の人民元安圧力の再来や米12月利上げ観測の高まりもまた市場センチメントにネガティブな影響を与え、投資家はより注意深くになっている。一方で、堅調な原油価格や活況を呈している中国・香港の不動産市場が、関連するセクターを中心として株式市場の下支え要因となっている。

■ 今月の見通し

【11月の香港ドル直物相場】

米ドル/香港ドルは7.750から7.765と、前月からほぼ同じレンジ内で推移すると見込む。米利上げのペースは非常に緩やかなものと予想されるため、大規模な資金流出が起こる可能性は低い。人民元安圧力が再来しているとはいえ、中国が年間の経済成長目標である6.5%の成長率を達成できそうであるため、市場参加者に動揺は見られない。中国経済のハードランディング懸念や人民元の急落懸念についても沈静化している。敢えて気にするとすれば、来年3月の香港行政長官選挙だろう。米ドル/香港ドルフォワードポイント1年物については、米ドルLIBORの上昇が一服したと見られるため、さらに低下する可能性は低い。

【11月の香港ドル金利市場】

米12月利上げの可能性が高まっているとはいえ、HKMAが為替基金証券の発行ペースを鈍化させたことから、市場からの資金吸収が減少し、香港ドルの短期金利は低位で安定して推移するだろう。HKMAは不動産バブルを崩壊させないために低金利を維持すると我々は考えている。原油価格の上昇でインフレ期待が高まっているため、中長期の金利には上昇圧力がかかるだろう。インフレや米利上げが加速すれば、香港ドル金利スワップ市場ではさらなる金利上昇が起こるだろう。

■ 今月のつばやき(現地からの声)

『当地のファッション事情』

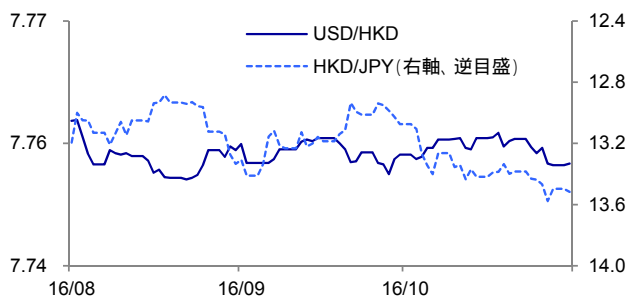
香港ではファッションの流行は国内外の有名人の影響を強く受ける。テレビドラマもよく参考にされ、例えば韓国ドラマ「星から来たあなた」に出演しているキム・スヒョンやチョン・ジヒョンのヘアスタイルやファッションは大変多くの人々が真似している。また数年前であればデビッド・ベッカムや木村拓哉と同じヘアスタイルの男性が街中で見られた。他方、ジュノ・マック、ワイマン・ウォン、タン・チーケイなど優れたファッションセンスを備えた香港の有名人もいる。彼らはエンタテインメントや音楽業界で活躍しており、そのファッションセンスは常に人々の注目を集めている。

地区によってファッションの特徴も異なる。セントラルでは知的で洗練されたファッションが見られる一方、モンコックでは活動的でスタイリッシュなファッションが見られる。香港のような小さな街で趣味の異なるファッションが見られるのは興味深い。

タオバオというインターネットサイトでは服やアクセサリを安価で購入できる。2012年のデータによると、香港のオンラインショッピングは総額148億香港ドルに上り、120万人もの利用者がいた。オンラインで服を買うのは最近の流行であり、香港のファッションをますます多様化させている。

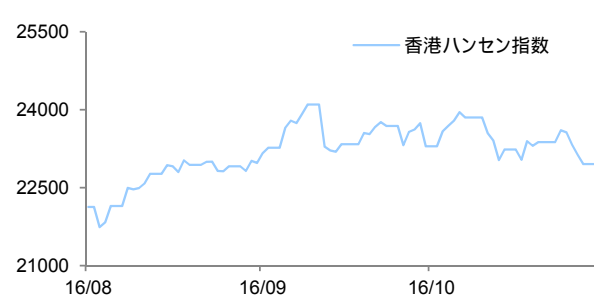
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/5	日経香港PMI	9月	--	49.3	49.0
10/7	外貨準備高	9月	--	\$362.5b	\$362.7b
10/18	失業率(季調済)	9月	3.4%	3.4%	3.4%
10/19	総合利率	9月	--	0.25%	0.25%
10/20	CPI(コア) (前年比)	9月	2.3%	2.7%	4.3%
10/27	輸出(前年比)	9月	-0.4%	3.6%	0.8%
10/27	輸入(前年比)	9月	1.3%	4.1%	2.8%
10/27	貿易収支	9月	-38.9b	-39.7b	-32.1b

中国人民元相場

予想レンジ:	USD/CNY	6.6300	～	6.8300
	CNY/JPY	14.35	～	15.99
	100JPY/CNY	6.2500	～	6.6300

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 上城戸 千尋

■ 先月の為替相場

【為替相場】

10月のドル/人民元相場は人民元安方向へ大きく進み、人民元は年初来の安値を更新した。
10月1日～7日は国慶節休暇でオンショア市場は休場であったが、その間に発表された米経済が良好な結果であったことや、メイ英国首相の発言をきっかけとしたEU単一市場へのアクセスを伴わない英国のEU離脱(Hard Brexit)に対する懸念の再燃を背景にドル高が進行し、オフショア市場では6.67台後半から6.72手前まで人民元安方向へ推移した。国慶節明け10日のオンショア市場は、人民銀行(PBoC)仲値が9月30日対比230pips人民元安の6.7008に設定され、実勢相場も6.70付近でオープン。ドル高基調の中、連日人民元安が進み、6.73付近まで人民元安となった。
17日の週前半はドル高が一服したことや介入と思しきドル売り人民元買いのフローが入り、ドル/人民元相場は6.74付近で横ばい推移。19日に発表された中国7～9月期GDPも市場予想と一致し相場への影響は限定的であった。しかし、20日に実施されたECB理事会にて現状維持が決定され、次回会合で緩和延長決定を行う可能性が示唆されたことなどからユーロが下落しドル高へ。その流れを受け翌21日のPBoC仲値は前日対比247pips人民元安の6.7558に設定され、実勢相場も6.74付近から6.76半ばまで人民元安が進んだ。その後も人民元安の流れが継続し、ドル/人民元は一時6.78台に乗せて推移した。

【金利相場】

月初は国慶節休暇を超えたことで流動性も緩和され、9月末に上昇していたSHIBORオーバーナイト物は国慶節前の水準まで低下した。しかし、月半ばから、外資系銀行や株式制商業銀行を中心に資金調達ニーズが強まり、SHIBORを上回る金利水準での調達も見られる等、流動性はタイト化。月後半には、公開市場操作は連日ネットで資金供給となったものの、ドル売り元買い介入による人民元の吸い上げや、これまでオフバランス扱いが黙認されていた理財商品を広義の貸出に含めてマクロブレンデンス評価の枠組みで管理する検討がなされているとの報道を受け、投資家から預かっている資金への預金準備率適用観測から警戒感が高まり、資金需給はよりタイトな状況。資金を供給するサイドであることが多い中資系銀行も資金調達サイドに回る動きも見られ、SHIBORは全般的に上昇した。

■ 今月の見通し

【為替相場】

10月のドル/人民元相場はドル高を背景に人民元安方向へ進んだが、11月もその流れは継続すると予想される。10月中の人民元実勢相場は9月末から約1.6%人民元安が進んでおり、今年6月の英国民投票後1か月に人民元安が進んだときと同程度の水準となっている。人民元安により中国からの資本流出懸念も強まる中、当局は以前から過度な人民元安を押さえたいとの意向があると見られていることも考慮すると、11月については10月よりも緩やかに人民元安方向へ推移すると見ている。
10月1日よりSDR構成通貨入りし、国際通貨としての地位を高めた人民元は、PBoC仲値について前日の他通貨の動きを反映した設定となっている。一方で、日中取引では介入と思しきドル売り人民元買いの大ロフローが入る場面もあり、10月25日の易PBoC副総裁の発言にあるように「中国は今後も人民元相場を“適度な均衡水準で基本的に安定”維持する」ということだろう。当局が考える適度な均衡水準がどの程度の水準かは見極めが必要であるものの、まだしばらくは人民元安が続くと見られる。
11月は米大統領選挙が控えており、現時点ではトランプリスクは後退しつつあるとの見方が強いが、不確定要素としてドル相場に影響を与える可能性がある。また10月前半からBrexit問題に対する懸念も再燃しているため、外部要因からドル/人民元が大きく振れることも有り得るだろう。

【金利市場】

10月は通常の納税等の資金調達ニーズの高まりに加え、これまでオフバランス扱いが黙認されていた理財商品に対する監督についての報道や人民元安進行による当局介入等の影響で、より流動性がタイト化し、金利は上昇した。当局による連日の公開市場操作の実施や中期貸出ファシリティー(MLF)の実行等、金融政策に対するスタンスは変わらないと見られ、資金が枯渇し急激な金利上昇が起こる可能性は低いと思われる。しかし、今月も当局の動向や為替相場の動き次第では、一段の流動性のタイト化や金利上昇の可能性があると考えられることから、引き続き動向に注視したい。

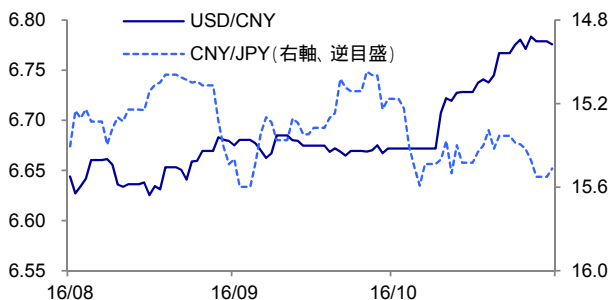
■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地のファッション事情』

中国の方は一般的に派手好きで、好きな色は赤色と金色とされています。しかし、私がいる上海は中国の中でも都会のエリアなので、特に20～30代の女性のファッションはベーシックでおしゃれな感じの人が多いです。日本人よりも手足がすらっとしていますので、個人的にはノースリーブやミニスカートのとでも似合うと思います。買い物には“淘宝(タオバオ)”に代表されるネット通販を使うことも多いようで、そのサイトを確認すれば今の流行っているものがわかるよ、と現地スタッフに教えてもらいました。韓国や日本のファッションもある程度人気ようです。街中には見知ったファストファッションのお店もたくさんあるので、ベーシックな服装であれば、買い物に困ることはないと思います。
中国ファッションと言ったら、忘れてはならないのがチャイナドレス。ドレスなので、普通の生活をしていたら見る機会がありません。そのため、チャイナドレスを着て写真を撮ってもらえるお店があります。日本の着物と違い、ボディーラインがよくわかるチャイナドレスを着るのは勇気がいりますが、今度職場の方と一緒に行って、綺麗な写真を撮ってもらう予定です。噂では写真がとて修正されるようなので、仕上がりはきっと大丈夫のはずです。

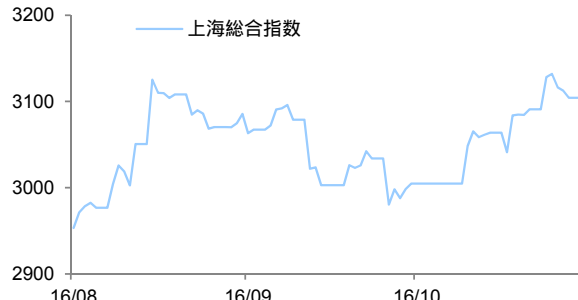
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/1	製造業PMI	9月	50.5	50.4	50.4
10/13	貿易収支(RMB建)	9月	364.50B	278.35B	346.00B
10/13	輸出(RMB建)(前年比)	9月	2.5%	-5.6%	5.9%
10/13	輸入(RMB建)(前年比)	9月	5.5%	2.2%	10.8%
10/14	CPI(前年比)	9月	1.6%	1.9%	1.3%
10/14	PPI(前年比)	9月	-0.3%	0.1%	-0.8%
10/19	GDP(前年比)	3Q	6.7%	6.7%	6.7%

シンガポールドル相場

予想レンジ:

USD/SGD 1.3700 ~ 1.4150
SGD/JPY 73.00 ~ 76.00

アジア・オセアニア資金部 鈴木 教子

■ 先月の為替相場

シンガポールドル(SGD)相場は、米利上げ期待を背景に4月以来の持ち合いを抜けて、対ドルで7か月ぶりの安値を更新した。

月初SGDは1.36台前半でオープン。第1週は、9月ISM製造業及び非製造業景気指数、新規失業保険申請件数などの米経済指標が予想を上回り、米早期利上げ期待が高まったことを受けてドルが対主要通貨で買われた。中でも円・ポンドは連日下落し、ドル高の流れを主導した。特にポンドは2日の英保守党大会でのメイ首相の発言を受けて、EU単一市場へのアクセスを失う(Hard Brexit)懸念が強まり、週明けから急落した。この流れの中でSGDもほぼ連日下落し、4日には9月につけた直近の安値を抜いて1.37台前半までSGD安が進んだ。7日は米9月雇用統計の内、非農業部門雇用者数が予想を下回り、発表直後こそドルが売られたが、前回分の上方向修正などを好感して、結局ドルが反発して引けた。SGDも1.37台前半を維持して越えた。

第2週も、シンガポール通貨庁(MAS、中銀)の通貨政策発表に対する警戒感もあり、SGDが連日安値を更新する展開となった。10日は連休中のドル高に追いつくようにして人民元が急落してオープン。プミポン・タイ国王の容態悪化が伝えられてバツも急落し、アジア通貨は軒並み下落した。翌11日は、ハト派で知られるエバンズ・シカゴ連銀総裁が「12月の利上げは構わない」と述べたことを材料にドルが続伸。SGDは13日には1.38台後半まで売られた後、一旦1.38台前半まで戻してMASの会合を迎えた。会合においてMASは中立スタンスを維持し、政策バンドの中心値、幅ともに現状で据え置いた。これを受けてSGDが一瞬買われたが、7~9月GDP速報値が予想を大幅に下回ったことを嫌気して一転SGD売りが強まり、1.39台前半までSGD安が加速した。第3週はドル買いの勢いが弱まり、SGDは安値圏で揉み合い。17日に米10月NY連銀製造業景気指数が予想を下回るとドルが反落。また18日は中国7~9月期GDP発表を控えた利食いが出て、1.38台前半までSGDが反発した。しかし19日に発表された中国GDPは予想通りだったため、SGDの反発も止まり、20日に米10月フィラデルフィア連銀景気指数や9月中古住宅販売件数がともに予想を上回ると再びドル堅調となった。更に21日に人民元が急落し約6年ぶりの安値をつけると、SGDも1.39台後半をつけて7か月ぶりの安値を更新した。第4週は人民元売り圧力が和らいだこともあり、また1.40の心理的水準を目前に利食いも出たため、SGDは1.38台後半から1.39台半ばのSGD安値圏で揉み合いが続いている。

■ 今月の見通し

11月のシンガポールドル(SGD)相場は、引き続きSGD安基調での推移を予想する。

MASは10月の定例見直しで予想通り現状の通貨政策を据え置いたが、声明文では「中立スタンスをより長期間継続する必要がある」と記しており、これはタカ派寄りのMASとしては異例とも言えるハト派色の強い声明であった。外需の落ち込みに加えて、国内不動産市場が冷え込みつつあり、強い景気回復の手掛かりが見えない一方で、長引く景気停滞から労働市場に逼迫感は見えず、インフレリスクが小さいことが背景であろう。MASは6年間に亘って継続して来たシンガポールドル高誘導を今年4月に停止して中立スタンスに移行したばかりであり、もとより市場は今回の発表でスタンスの変更を予想していなかったが、実際のところは単なる様子見ではなく、中立スタンスを継続する必要性があり、むしろ予想外の危機的状況が発生した場合(例えばHard Brexitなどにより)、より緩和的な政策を採る準備があると見た方が良くもしいない。

この様な状況下で、SGDは10月に持ち合いを抜けてSGD安が加速した。主要バスケット構成通貨のユーロ、円、人民元安が背景にあるが、MASが引き締めスタンスに回帰するのはかなり先になりそうで、これらの通貨が下げ止まったとしてもSGDは比較的軟調に推移する可能性がある。

11月上旬は米大統領選があり、クリントン氏の勝利がほぼ確実と思われる。その後は12月のFOMCでの利上げを視野にドルが全般的に底堅い地合いを維持しそうだ。利食いからドルが反落する局面があっても、SGDの戻りは持ち合いを抜けた起点である1.37近辺に留まると見ている。また心理的な支持線である1.40を抜けてSGDが売られることがあれば、1.41台前半程度まで続落する可能性があると考えている。

■ 今月のつばやき(現地からの声)

『当地のファッション事情』

シンガポールはインド系、マレー系、中華系が共存している国なので、街を歩くと三者三様の服装が見られます。

インド系の人々が着ているのは主にバンジャビ・ドレスという民族衣装で、一見してインド系とわかるあの服装です。そして、マレー系の人々は多くがイスラム教徒なので、ヒジャブと呼ばれるベールを被り、服装も全身を隠すような服が多いです。一方、中華系の人々はマレー系とは正反対で、足がパーン！と飛び出す感じの服装(非常に短いショートパンツなど)をしているケースが多く、目のやり場に困ります。

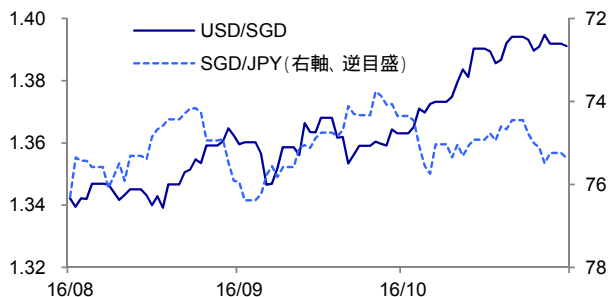
常夏の国なので、個人的には正解は中華系だと思っていますが、若者だけかと思いきや、年齢問わずの部分もあり、ここが日本とは決定的に違うのではないかと考えています。また、とにかく足を見せたいのか、足元はビーチサンダル率が高く、これも日本ではあまり見られないような気がします(注:日本のファッションは5年前の記憶に基づいています)

男性の服装で気になるのは日本語Tシャツで、当地に限ったことではないと思いますが、外国の方々は日本語が書かれたTシャツを着るのが好きようです。今のところ一番インパクトがあったのは「ぎっくり腰」です。

最後に、服装ではありませんが、当地ではハローキティがとても人気です。以前マクドナルドでバーガーセットを買ったとキティ人形を買える権利がついてくる(もらえるわけではない)イベントがありましたが、尋常ではない行列だったので食べるのを諦めました。国ごとにファッションや関心が違うのはとてもいいことだと思います。日本人と顔、形は似ていても、一目で日本人ではないことがわかります。皆さまも当地にいらつしやることがあれば、是非その違いをお楽しみください。(吉田)

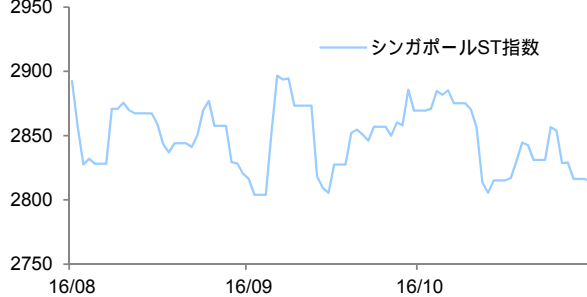
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/3	購買部景気指数	9月	49.9	50.1	49.8
10/3	電子産業指数	9月	-	50.3	50.2
10/14	GDP (前年比)	3Q	1.7%	0.6%	2.0%
10/14	小売売上高 (前年比)	8月	1.9%	-1.1%	1.4%
10/17	非石油輸出 (前年比)	9月	-5.8%	-4.8%	0.0%
10/24	CPI (前年比)	9月	-0.2%	-0.2%	-0.3%
10/26	鉱工業生産 (前年比)	9月	1.0%	6.7%	0.5%

タイバート相場

予想レンジ:

USD/THB 33.70 ~ 35.05
THB/JPY 2.95 ~ 3.10

バンコック資金室 井上 由貴

■ 先月の為替相場

●ドル/バートは一時今年1月以来の高値を記録する荒れ相場。

上旬、ドル/バートは堅調に推移。月初3日、34.60台でスタート。同日発表された9月消費者物価指数(CPI)は前年比+0.38%とほぼ予想通りの結果となった。その後、ECBのテーパリング観測を背景に欧米金利が上昇したことや、米9月ISM非製造業景況指数が予想を上回ったことを背景にドル買いが優勢となると、ドル/バートも35.00乗せをうかがう展開。

中旬、ドル/バートは一時35.80台まで上昇。9日夜に、タイ王室がプミポン国王の容態が不安定であると異例の発表を行うと、週明けのドル/バートは一気に大台の35.00を上抜け。株式相場の急落もバート売り要因となり、神経質な値動きの中、12日には今年1月以来の高値となる35.90近辺までバート売りが進行。しかし、13日の株式市場クローズ後に王室から国王崩御が発表された後は、バートが急速に買い戻される展開。翌14日、タイ市場は通常通りの営業となり、タイバート、タイ株式とも買い戻しが続く、ドル/バートは一時35.00割れを試す。ウィラタイ・タイ中銀(BOT)総裁が「外為市場で異常な投機は見られない」「流動性が逼迫した場合はバートの流動性を支える用意がある」と発言したこともバート買い戻しを後押しした。週明け17日以降もタイ市場は通常営業となり、国内に大きな混乱も見られずバートは買い戻し優勢。原油価格や欧米株式が堅調に推移したことや、19日に発表された中国7~9月期GDPが市場予想通りの前年比+6.7%となり中国景気減速懸念が後退したことで、グローバルにリスクセンチメントの改善が続き、ドル/バートは一時34.80台をつけた。

下旬、節目の35.00を挟んで揉みあい。人民元が対ドルで売られたこともあり、ドル/バートは35.10台まで上昇するも、債券市場への資金流入や株式市場が底堅く推移したことを背景にバート買いが優勢となると26日にかけて再び34.80台まで下落。26日、タイ商務省は9月貿易統計を発表。輸出実績は2か月連続でプラスとなる前年同月比+3.4%の194億6000万ドルとなったものの相場の反応は限定的だった。

■ 今月の見通し

●ドル/バートは底堅く推移か

国王崩御に前後してドル/バートは35.90近辺まで上昇するパニック相場となったが、足許では落ち着きを取り戻しつつある。バート売りの原因ともなった、債券市場における海外投資家の資金流出も一旦歯止めがかかり再び35.00割れに戻すなど、需給を反映したバート買い圧力の強さが感じられる。ただ一方で、バート安要因、バート高要因を挙げてみると、久しぶりにバート安要因の多さに気づく。

9日、BOTの金融政策決定会合(MPC)が開催される。国王崩御後初の会合となり、注目が集まる。30日間のイベント自粛に加え、1年間の公式服喪期間における個人消費の落ち込みが懸念されている。また、タイ経済の牽引役となっている観光業にも影響が出てくることが予想される中、BOTの利下げ期待が醸成されつつある。現在政策金利は1年以上に亘り1.50%に据え置かれているが、過去最低水準が1.25%であることを考えると、BOTは25bpの利下げカードを持っていると考えられる。少し古い話になるが2008年のガラヤニ王女が逝去した際を振り返ると、政府のイベント自粛を受け、まず政府支出が縮小、その後民間にも波及し、最終的にはGDP成長率を押し下げる結果となった。今回は、政府としては金融機関や産業界に対し通常通りの経済活動呼びかけなど経済への影響を最小限に抑えたいとの意図が見て取れる。景気落ち込みが経済指標に現れるには少し時間がかかるが、景気落ち込みが顕在化する前にBOTが利下げの先手を打ってくる可能性は大いにあり、今月のMPCにも注目が集まる。今月利下げに踏み切るとは考えづらいが、近い将来の利下げを匂わす内容が出てくれば素直にバート安で反応か。また政治的にも、民政移管への遅れが懸念されることに加え、10月下旬には爆発事件が起きるとの噂が流れるなど、タイ国内が再び混乱に陥る可能性もあり、突発的な事象でバート安に触れる可能性は頭に入れておきたい。

タイ国外に目を向けると、注目は米利上げ動向である。金利先物市場から算出される12月の利上げ織り込みは70%を超え、もはやダンディールになりつつある。11月8日の米大統領選を終えれば、市場に漂う不透明感は後退すると考えられ、ドルは12月のFOMCに向けて底堅く推移すると思える。ドル/バートも例外ではなく、ドル/バートのサポートとなると考えている。

以上を勘案すれば、今月のドル/バートは底堅く推移するのではないかと。

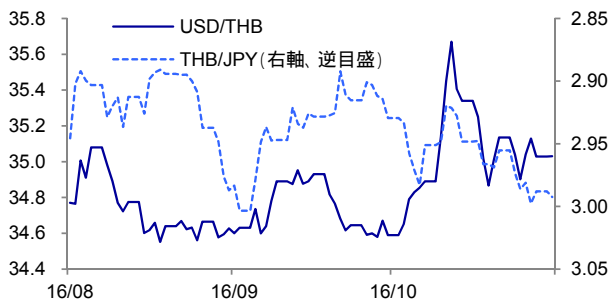
■ 今月のつばやき(現地からの声)

『当地のファッション事情』

タイは現在、1年間の服喪期間にあります。タイ政府は、公務員と国営企業従業員に黒色あるいは白色の衣服の着用を命じています。民間企業でも黒色の衣服を着用する動きが続いており、特にバンコク市内は、黒または白の服を身に着けている人がほとんどで、明るい色の服を着ている人はほぼ見かけません。タイの重要産業である観光セクターの落ち込みは避けたいところで、個人消費という観点からも、極端な自粛ムードというのも考え物ですが、タイ国内が悲しみに沈んでいることもまた事実。タイにご旅行でいらっしゃる際は、服装にご注意いただくとともに、国内の気持ちに配慮していただくよう、どうか宜しくお願い申し上げます。

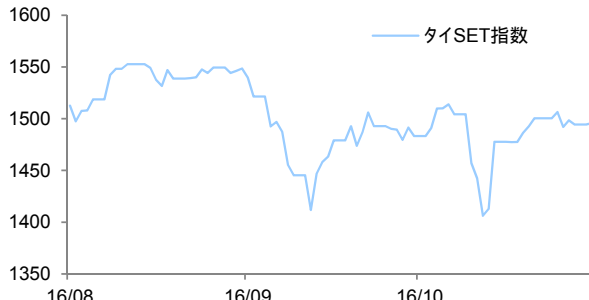
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/3	CPI (前年比)	9月	0.40%	0.38%	0.29%
10/6	消費者信頼感	9月	-	74.2	73.2
10/25	自動車販売台数	9月	-	63641	63619
10/26	輸出 (通関ベース/前年比)	9月	-1.30%	3.40%	6.50%
10/26	輸入 (通関ベース/前年比)	9月	0.50%	5.60%	-1.50%
10/31	通関貿易収支 (USD)	9月	\$2700M	\$2546M	\$2128M
10/31	製造業生産指数	9月	0.1%	0.6%	3.1%
10/31	設備稼働率指数	9月	-	65.2	64.4
10/31	経常収支	9月	\$2500M	\$2929M	\$3805M

マレーシアリング相場

予想レンジ:

USD/MYR 4.15 ~ 4.30
MYR/JPY 24.00 ~ 26.00

アジア・オセアニア資金部 宮地 崇

■ 先月の為替相場

先月のリング相場は4.11台前半でオープン。オープン後、良好な米国経済指標の結果から、FRBによる年内利上げ観測の高まりに米金利が上昇。リングはこの米ドル金利上昇を背景としたドル買い優勢の動きに、4.14台後半まで下落。9月末のOPEC非公式会合における減産暫定合意以降、原油価格は堅調に推移するも、リングは弱含む展開となり、4.15台前半まで続落。7日には、マレーシア8月貿易収支が発表され、予想を大きく上回る85億リングの黒字となるも、リングへの影響は限られた。

11日には再び米金利上昇からリングは下落。翌12日には発表されたマレーシア8月鉱工業生産が前年比+4.9%と予想同+5.4%を大きく下回る内容にリング売りが加速。13日には原油価格の反落も相まって、今年3月以来の安値圏となる4.22台前半レベルをつけた。その後も、アジア通貨が総じて軟調に推移したことに加え、マレーシア中銀が9月の債券市場からの資金失額を当初から増額修正したことも手伝い、リングは上値の重い地合が続いた。

月半ばに入ると、予想を上回る米経済指標とマレーシア債券価格の下落も相まって再度4.22台前半まで軟化。しかし、週後半にかけて米金利上昇に一服感が出ることに加え、原油価格の堅調推移も手伝い20日には4.17台前半まで強含んだ。その後、マレーシア9月消費者物価指数が発表され、落ち着いた内容となったが相場への影響は限定的となった。結局、リングはやや売られ4.18台後半でクローズした。

月後半には、21日に公表されたマレーシア2017年度予算案で財政再建方針堅持などの内容が好感されたことや他のアジア通貨が総じて底堅く推移したことから、リングは一時4.14台前半まで反発。しかし、その後は原油価格の軟調推移や米国利上げの期待感にドルが買われると4.19台後半まで軟化し越週。月末日である31日にはリングは続落。結局4.19台半ばで取引を終えている。

■ 今月の見通し

先月発表されたマレーシアの経済指標は強弱入り混じる内容となった。まず、8月の輸出額が前年比+1.5%と前月のマイナス転から回復。一方、8月のマレーシアの鉱工業生産については予想を下回る内容となった。直近の経済指標からマレーシアの景況感については、一進一退といった状況が読み取れるが、一部公的機関は先月上旬にマレーシアの今年と来年の経済見通しの予想の引き下げを実施。少なくとも経済環境が本格的な回復軌道に乗ったとするには、まだ時期尚早と見られる。加えて、アジア地域諸国のなかでも、同国の景況感に対する懸念は根深く、経済環境は当面リングの上値を抑える要因となろう。

また、直近3ヶ月は、リングとマレーシア国債価格との相関性が高く、債券価格の下落がリングの軟調推移を喚起した可能性が大きい。マレーシア国債の金利動向は米国長期金利の動きを反映しやすいことから、年内利上げに向け米国金利の底堅い地合が想定されるなか、マレーシア国債価格の低下リスクは払拭できず、リングの上値の重い展開は継続か。

一方で、21日に発表された2017年マレーシア予算案は、財政赤字のGDP比▲3.0%への削減目標が織り込まれ、昨年に続き財政健全化路線が踏襲されることが確認された。再来年の総選挙を控え、より選挙色の強い内容となり財政規律が緩むとの思惑もあったが、ひとまず現状が維持され、格付会社による同国国債の格下げのリスクは遠のいた格好だ。長期的にこの財政健全化維持の方向性は、リングにはポジティブな材料として機能するものと思われる。

加えて、為替相場ではボラティリティーの低下傾向が顕著となっている。ドルリング間の1ヶ月物の水準は、昨年7月以来の水準まで下落。この間、リング安の進行に伴い、ボラティリティーも上伸したという経験則を踏まえると、市場では、一旦強烈なリング安を見込む動きが後退しているものと思われ、リングの下落余地も限られよう。

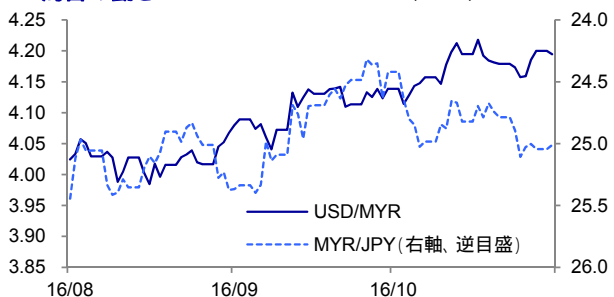
上記の状況を踏まえると、以前ほど激しくリング安が進む展開は考えづらいものの、引き続き、リングの上値の重い展開が続くものと予想する。

■ 今月のつばやき(現地からの声)

『当地のファッション事情』
当地のファッション事情ですが、南国でありながらイスラム教を国教としていることが影響してか、イスラム教徒であるマレー系の人たちは基本的に肌の露出を殆どしません。女性はトゥドゥン(アラビア語ではヒジャブ)を被り、顔は見せてますが手以外は基本的に隠してますし、男性も短パンは穿かず長ズボンです。KLの中心地には高級ブティックが多数軒を並べているエリアもありますが正直、基本的に客が入っておらず、いたとしても観光客なので、「お洒落をする＝お金を掛ける」という発想はないのかもしれませんが(或いは本当の金持ちは外商で買っているのかもしれませんが)。ただ、お隣のインドネシアではお洒落ヒジャブが流行っているというニュースを目にしましたが、マレーシアでも色々な色のトゥドゥンを被っている女性を目にする機会が増えているような気がするので、女性はお洒落できる範囲内で宗教的な制約を守りつついろいろお洒落をしているのかもしれない。一方、男性はお洒落よりも南国の暑さ故に機能重視のような気がします。また中華系マレーの人たちは当然ながら自由度が高く、女性は比較的露出度が高いような気がします。私は基本的には暑がりなのでエアコンががんがん効いていても余裕ながら時として寒さを覚えることもあるのに、常に肩丸出しの服を着ている女性を見ると本当に冷点はあるのかと疑いたくなったりします。気が付けば私もマレーシアに来て2年半。当初は真新しく感じていたトゥドゥンを被った女性もすっかり見慣れ何も感じなくなり、自分自身も仕事以外は常に半袖短パン、且つ水がいきまいちなので褪せても良い安めの服を迷わず選ぶようになってきました。きっとこの国のファッションの原点はそんなところにあるような気がします。(マレーシアみずほ 山田)

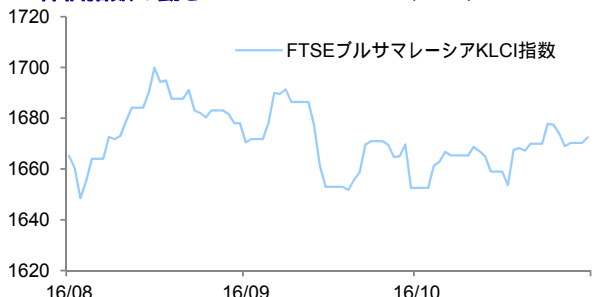
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/7	輸出 (前年比)	8月	-2.3%	1.5%	-5.3%
10/7	輸入 (前年比)	8月	2.0%	4.9%	-4.8%
10/7	貿易収支 (MYR)	8月	6.60b	8.51b	1.91b
10/12	鉱工業生産 (前年比)	8月	5.4%	4.9%	4.1%
10/21	消費者物価指数(前年比)	9月	1.8%	1.5%	1.5%

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR	12600	~	13300
IDR/JPY	0.75	~	0.83
JPY/IDR	120.00	~	129.10

(注)100インドネシアルピアあたりの対円レート

インドネシಾಮィズほ銀行 河合 良介

■ 先月の為替相場

10月のドル/ルピアは、月半ばに上昇する場面も見られたが、12950～13080と総じて狭いレンジでの堅調な推移となった。

9月下旬に約1年5か月ぶりのルピア高を演出したタックス・アムネ스티(租税恩赦)絡みの資金流入は一服した格好。

月前半、13020近辺でスタートしたドル/ルピアは、3日発表された予想通りの消費者物価指数(CPI)には反応薄で13000挟みの小動きの展開に終始した。7日に発表された外貨準備高は、前月比+USD2.13bilのUSD115.67bilと着実に増加している。

月半ば、年内米利上げ期待の高まり、また冴えない貿易統計の結果を受け、ドル/ルピアは上昇する場面があり、一時13080近辺をつける場面もあったが、その後、海外からの資金流入により反落。

17日発表された貿易収支は、予想に反し輸出・輸入共に前年比減少。輸入の減少幅が輸出のそれを上回り予想以上の貿易黒字額となったが、市場の反応は限定的であった。

月後半、10月20日のインドネシア中央銀行(BI)による予想外の利下げ(新指標:7日物リバースレポ金利になってから2回目、通年では6回目)後は、一時的にルピア売りで反応する場面も見られたが、市場は、今回の利下げは、インドネシア景気浮揚のサポート材料ととらえ、ドル/ルピアは下落。月末輸入企業によるドル買い需要を上回る形で海外からの資金流入が加速し、26日時点で13010近辺での堅調な推移となっていた。

※タックス・アムネ스티(租税恩赦):インドネシア政府が、過去に海外へ流出した資金をインドネシア国内に呼び戻すために、来年3月まで、過去の脱税による訴追を行わず、納税義務を一部免除する法案を6月に可決。段階的に軽減税率が上がる仕組みになっている。

■ 今月の見通し

今月のドル/ルピアは、引き続きルピア堅調な展開を予想する。

対外要因においては、9月FOMCにて、金利据え置き決定。FOMCメンバーによる2017年の政策金利見通しも下方修正される結果に。12月FOMCにおける利上げ期待は、既に市場は相当程度織り込んでおり、ルピアの下落圧力は限定的とみる。

一方、国内に目を向けると、当初不調と報道されていた租税恩赦絡みの納税額・資金流入は、9月下旬に入り急速に増加し、堅調なルピア相場をサポート。第1段階の軽減税率(3段階で段階的に税率が上がる仕組み)適用期間が、当初の9月から12月まで延長されていること、また、BIの緩和姿勢が、市場から好感されていることから、海外からの資金流入がルピアサポート材料となると考えられる。

11月上旬発表予定の7～9月期GDPにて、足許の景気動向結果を確認することになるが、GDPの約半分を占める民間消費項目が冴えない結果となると予想するが、市場の反応は限定的と見ている。

金利については、マルトワルドヨBI総裁が、緩和姿勢の維持を示しており、年内、更なる利下げの可能性も否めないだろう。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地のファッション事情』

インドネシアでは、パティック(Batik)と呼ばれる布地を使った、民族服があります。割と派手めな柄なのですが、正装として認識され、仕事服としても使えます。

ジャカルタ在任時は、誕生日にスタッフからプレゼントとしてもらった1枚を、カジュアルフライデーに着用していました。

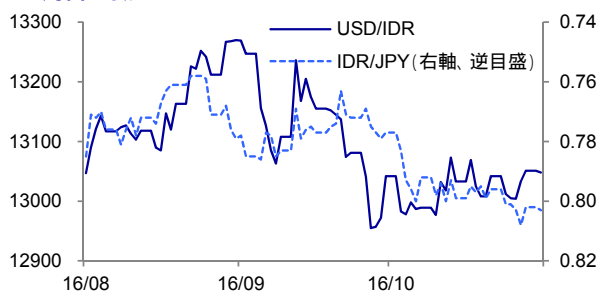
見た目は派手なのですが、初めて着用した日、多くのスタッフから褒めてもらい、インドネシア人スタッフとの距離が縮まったことを実感すると共に、こういうのがシャレオツなんだなあ、と不思議に思ったことを記憶しています。

このパティックですが、機能性も実に高く、着心地が非常に良いです。現在の勤務地であるシンガポールから、インドネシアに出張する際、ジャカルタ在任時に比べ移動距離が格段に増えましたので、Yシャツの上にジャケットの組み合わせよりも、格段に楽なこのパティックをスーツケースに数枚忘れずに入れてまして、お客様を訪問させていただいております。

現在のストックも5枚程度に増えた訳ですが、誰からももらったか?は聞かないでください(笑)。

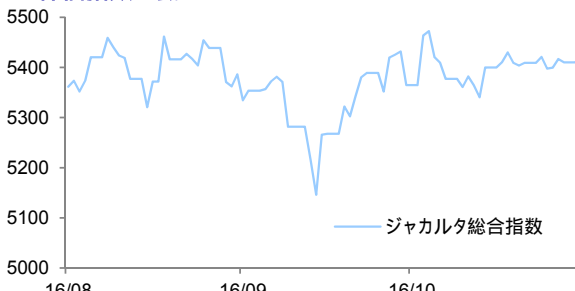
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/3	CPI(前年同月比)	9月	3.05%	3.07%	2.79%
10/7	外貨準備高(USD B)	9月	-	115.67	113.54
10/17	貿易収支(USD M)	9月	588	1,217	363
10/17	輸出(前年比)	9月	0.60%	-0.59%	0.17%
10/17	輸入(前年比)	9月	4.70%	-2.26%	-0.11%
10/20	BI 7daysリバースレポ金利		5.00%	4.75%	5.00%

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 48.00 ~ 49.50
PHP/JPY 2.10 ~ 2.18

マニラ支店 樋上 陽一

■ 先月の為替相場

10月のドル/ペソ為替相場(オンショア・インターバンク市場)は前月に進んだドル高ペソ安の流れが一服。

9月は、①ドゥテルテ大統領の発言をきっかけとした米比関係の悪化が懸念されたこと、②12月のFOMC(米連邦公開市場委員会)での利上げ観測が当地の市場では根強かったこと、③欧州金融機関の信用不安からリスクオフになったことから7年ぶりのペソ水準である1ドル=48.50ペソレベルへ。

10月に入ってもペソ売りがどこまで続くかに注目が集まっていたが、欧州金融機関の信用不安が市場で消化され、外国人のフィリピン株の売り圧力が和らいだことに加え、急激なペソ安進行を牽制する当局の動きが強く意識されたため、ペソ安の流れは一服。

8月のOFW(海外在留フィリピン人労働者)送金が市場予想を大きく上回ったこと、外部格付機関ムーディーズが「政治の不透明感はあるが、経済のファンダメンタルズは強い」との認識を示したこと、ドゥテルテ大統領の訪中により、中比の経済関係強化を期待した比株買いが入ったことなどを材料に、一時的に短期プレーヤーのペソ買戻しに、1ドル=48.00ペソを割り込む場面もあった。

しかしながら12月の米金利利上げを期待する向きは多く、英国のEU単一市場へのアクセスを伴わない英国のEU離脱(HARD BREXIT)懸念からのドル買い需要も根強い。結局、10月ドル/ペソ相場は調整相場に上値の重さを確認したものの前月取引終了と同水準で取引されている。

(現地時間27日16:00現在)

■ 今月の見通し

11月のドル/ペソ相場は上値を窺う展開か。

9月に一方的にドル高が進み、調整相場は不可避と考えていたが、10月に1ドル=48ペソを一時的にでも割れて取引されたことで市場関係者の中では調整終了と考える向きが多そうだ。

なにより12月の米金利利上げの可能性が高まる中、ペソ買いを仕掛けづらい市場環境であることは間違いない。また、欧州金融機関の信用懸念リスク、HARD BREXITなどリスクオフのネガティブ材料に事欠かず、米大統領選挙という大きなイベントもある。

フィリピン株の外国人投資家売買動向は売り圧力が緩和しているとはいえ、今月も売り越しとなりそう。フィリピン株式指数(PSEi)は節目の7,500ポイントを割り込んでいます。

個人的に7,500ポイントを心理的な節目とみており、7,500ポイント近辺で耐えられるかに注目したい。グローバルにリスクオン相場になれば素直に買いで反応しやすい水準と思われるが、直近の安値である7,312.18ポイントを更新する株安の動きとなれば、利益確定の売りに晒されやすい年末に向けて、下落トレンドが長く続く可能性があり、ペソ安材料となる。当局介入や自然反発的なペソ買い以外にペソ高はイメージしづらい。

(現地時間27日16:00現在)

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地のファッション事情』

“女性の靴”をトピックスに。

日本は出勤時とオフィス内の靴、どちらがお洒落かといえば、多くの人が前者と答えるのではないかと。出勤時は余所行き、出勤後は楽で動きやすい靴やスリッパに履きかえることが多いかと思います。

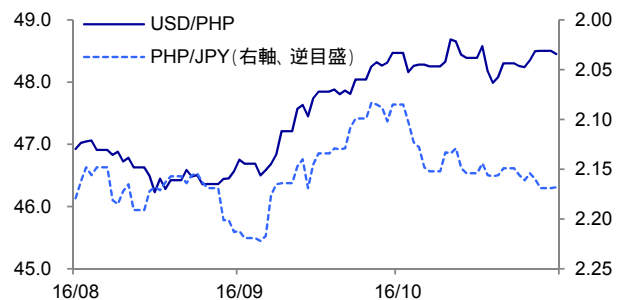
当地は、逆！！

オフィス内でお洒落な靴を履き(高いヒールを履いている女性も多い)、出勤は運動靴的なものを履いているイメージです。道がボコボコだったり、大雨が降ったり、いい靴を外で履くのはもったいない、という発想です。

日本の感覚でスリッパでオフィス内をペタペタ歩いていると変な目で見られます。

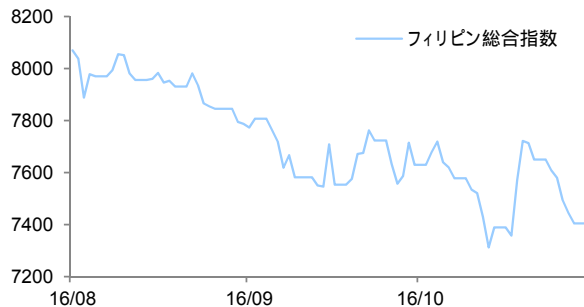
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日 イベント
上記コメントご参照

(資料) ブルームバーク
期間 予想 結果 前回

インドルピー相場

予想レンジ: USD/INR 66.50 ~ 67.20
INR/JPY 1.54 ~ 1.60

アジア・オセアニア資金部 田川 順也

■ 先月の為替相場

10月のインドルピー相場は対米ドルでやや水準を切り下げた。

ドル/ルピーは66.50レベルで10月をオープン。4日のインド準備銀行(RBI)政策決定会合を前に今月のインドルピー高値となる66.40を割り込んだが、当会合で25bpの利下げが決定されると、サプライズと捉えられインドルピーは反落。

月半ばにかけては為替市場全体でドルが買われる流れに加え、人民元主導で新興国通貨が全般的に弱含みを見せると今月のルピー安値となる67.00目前までルピー安・米ドル高が進行。ただし、13日以降に発表された、印9月消費者物価指数(CPI)、同卸売物価指数(WPI)が共に事前予想を下回る結果となると、インドのインフレ懸念後退の安心感からルピーも底打ち。

終盤にかけては米金利上昇に一服感が見えたことからドル買いが一巡するも、人民元が対ドルで6年ぶり水準まで安値追いとなると、新興国通貨も上値重く、ドル/ルピー相場は揉み合いとなり方向感を欠く展開となった。

27日時点でドル/ルピーは66.89近辺での推移となっている。

尚、ルピー/円相場は1.52レベルでスタート。既述の印政策イベントはあったが、ドル/円相場が101円台前半から104円台まで上昇する円安基調の中で、月半ばにルピー/円も一時1.57台をトライする展開。後半にかけても上値追いこそならなかったが、高値圏での推移が続き、27日時点でルピー/円は1.56近辺での推移となっている。

■ 今月の見通し

11月のインドルピー相場は相対的に底堅い展開を予想するも、引き続き米国や中国の要因に振られる展開を予想。

パテルRBI新総裁就任後初の政策決定会合で利下げを決定。マーケットでは5割弱程度の事前織り込みであったことから、RBIが先手を打ったかたちでややサプライズとなった。市場参加者の間では政権との良好な関係構築や早期の経済刺激策と捉えられ概ね歓迎スタンスとなっている。

ただ、12月の利下げがメインシナリオとなっていた中、前倒しで利下げしたことを勘案すれば今後連続して利下げがある蓋然性は現状では低く、追加利下げ観測は足許で後退中。併せてCPIはこもと食料を中心に下落基調ではあったが、原油価格の回復や国内公務員の賃上げ等、物価上昇材料も出てきていることから、一段の下落余地は小さいとみている。物価が上昇に転じるのであれば、利下げ期待はより後退すると考えられる。急激なインフレはルピー安要因となるが、緩やかな物価下落底打ちであれば、ルピー相場安定の一因になると考えられる。

また、今月は米大統領選挙が行われる他、FRBの正念場となる12月会合に向け市場参加者の利上げ可否についての予想が交錯し、ドルがボラティルな動きになることが想定される。また、安値を更新し続けている人民元相場の新興国市場へ与える影響も注意が必要だろう。

インド国内要因に対してはやや強気ではあるが、年末までのルピー相場を予想する上では海外要因に左右される部分があり、ボラティルな展開を想定している。

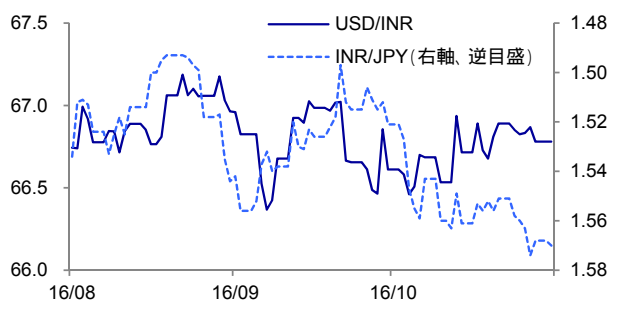
■ 今月のつばやき(現地からの声)

『当地のファッション事情』

このコラムのお題はお国ごとの当番制で、今回はインドが当番でした。さらに記事の執筆は支店内で当番で回しているのですが、いずれも私が担当するという幸運(?)に恵まれました。
渡印してから約5年。インドのファッションには興味があり、インド国内の工房を歩いていたものですが、いざコラムに書こうとすると何を書いたらいいのやら・・・。というのも、インドという思い出される、パンジャブドレスを着た子たちは今はもう昔・・・と言いたくなるほど、2016年のムンバイのショッピングモールでは、若い男女はみなジーンズに長い手足を露出した格好が目立ちます。ファストファッションで買い物するのがトレンドでしょうか。女性はみな一様に日本でよく見るブランドの紙袋をもっています。足は出さない、のがインド人女性のマナーと思っていましたが、少なくともムンバイの都心ではだいぶ様子が変わってしまいました。それでも少し都会を離れると、若い女性はパンジャブドレス、既婚女性はサリーを身に着けています。サリー(saree)とは1m×6mほどの一枚布でつくられたインドの伝統衣装です。一枚布の衣装が普及した理由は、インド人の8割が信仰するヒンドゥー教の思想が裁断・縫製をすることが不浄ととらえられたためといわれています。これから結婚シーズンに入るインド。せっかくなので同僚の結婚式に参加するためひとつサリーを新調してインドの伝統に染まろうと思います。(ムンバイ支店:渡辺)

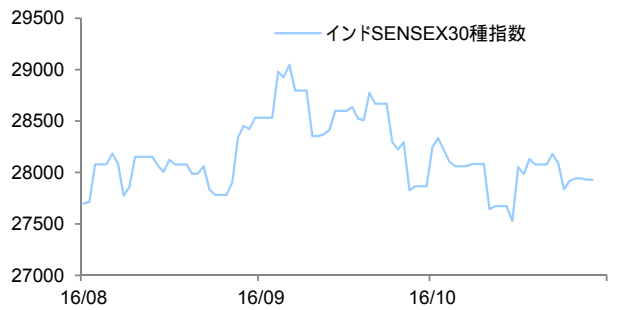
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

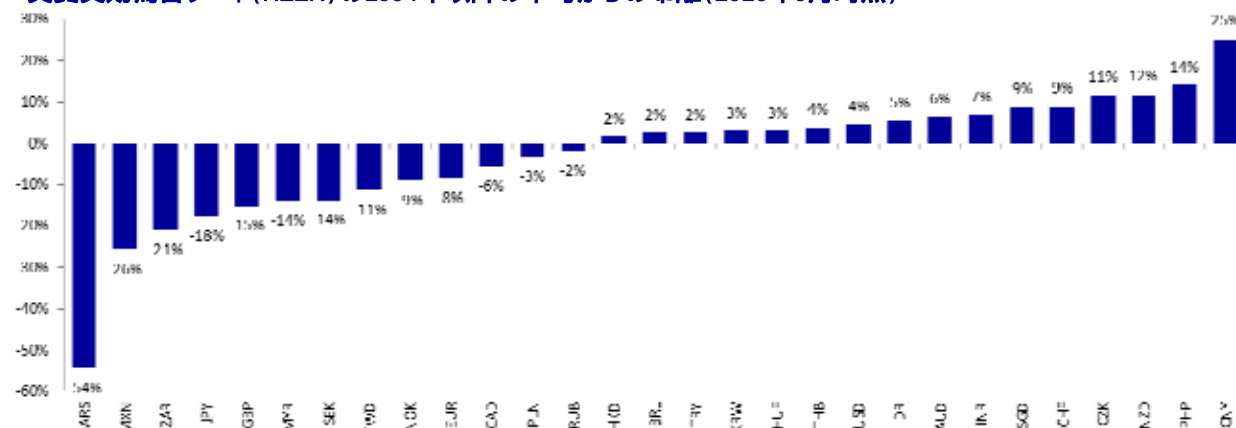
発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/3	日経インドPMI製造業	9月	-	52.1	52.6
10/4	RBIレポート	-	6.50%	6.25%	6.50%
10/5	日経インドPMIコンボジット	9月	-	52.4	54.6
10/10	鉱工業生産(前年比)	8月	▲0.8%	▲0.7%	▲2.5%
10/13	消費者物価指数(前年比)	9月	4.60%	4.31%	5.05%
10/14	卸売物価(前年比)	9月	3.90%	3.57%	3.74%
10/14	貿易収支	9月	▲\$8.00B	▲\$8.34B	▲\$7.67B
10/14	輸入(前年比)	9月	-	▲2.5%	▲14.1%
10/14	輸出(前年比)	9月	-	4.6%	▲0.3%

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2015年末	2016年10月末	騰落率	株式市場	2015年末	2016年10月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	17425.03	18142.42	4.1%	-
日本	USD/JPY	120.22	104.82	-12.8%	日経平均株価	19033.71	17425.02	-8.5%	5.0%
ユーロ圏	EUR/USD	1.0862	1.0981	1.1%	ドイツDAX指数	10743.01	10665.01	-0.7%	-0.7%
英国	GBP/USD	1.4736	1.2242	-16.9%	ロンドンFTSE100指数	6242.32	6954.22	11.4%	34.1%
豪州	AUD/USD	0.7286	0.7609	4.4%	S&P/ASX200指数	5295.9	5317.732	0.4%	-3.9%
カナダ	USD/CAD	1.3839	1.3409	-3.1%	S&Pトント総合指数	13009.95	14787.27	13.7%	17.3%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	6.4937	6.7758	4.3%	上海総合	3539.182	3100.492	-12.4%	-16.0%
香港	USD/HKD	7.7507	7.7552	0.1%	香港ハンセン	21914.4	22934.54	4.7%	4.6%
インド	USD/INR	66.1537	66.78	0.9%	インドSENSEX30種	26117.54	27930.21	6.9%	5.9%
インドネシア	USD/IDR	13788	13048	-5.4%	ジャカルタ総合	4593.008	5422.542	18.1%	24.8%
韓国	USD/KRW	1175.06	1143.78	-2.7%	韓国総合株価	1961.31	2008.19	2.4%	5.2%
マレーシア	USD/MYR	4.2943	4.1945	-2.3%	ブルサマレーシアKLCI	1692.51	1672.46	-1.2%	1.2%
フィリピン	USD/PHP	46.905	48.45	3.3%	フィリピン総合	6952.08	7404.8	6.5%	3.1%
シンガポール	USD/SGD	1.4185	1.3911	-1.9%	シンガポールST	2882.73	2813.87	-2.4%	-0.5%
台湾	USD/TWD	32.862	31.557	-4.0%	台湾加権	8338.06	9290.12	11.4%	16.0%
タイ	USD/THB	36.03	35.03	-2.8%	タイSET	1288.02	1495.72	16.1%	19.4%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2016年9月時点)



■ 実質GDP成長率

	2015Q1	2015Q2	2015Q3	2015Q4	2016Q1	2016Q2	2016Q3	2014	2015
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	2.0	2.6	2.0	0.9	0.8	1.4	2.9	2.4	2.6
日本*	5.0	-1.9	2.1	-1.7	2.1	0.7		0.0	0.6
ユーロ圏	1.8	2.0	2.0	2.0	1.7	1.6	1.6	1.2	2.0
英国	2.8	2.4	1.9	1.7	1.9	2.1	2.3	3.1	2.2
豪州	2.3	2.0	2.6	2.8	3.0	3.3		2.7	2.4
カナダ*	-1.0	-0.5	2.2	0.5	2.5	-1.6		2.5	1.1
エマージングアジア									
中国	7.0	7.0	6.9	6.8	6.7	6.7	6.7	7.3	6.9
香港	2.4	3.1	2.3	1.9	0.8	1.7		2.7	2.4
インド	6.7	7.5	7.6	7.2	7.9	7.1		7.2	7.6
インドネシア	4.7	4.7	4.7	5.0	4.9	5.2		5.0	4.8
韓国	2.4	2.2	2.8	3.1	2.8	3.3	2.7	3.3	2.6
マレーシア	5.7	4.9	4.7	4.5	4.2	4.0		6.0	5.0
フィリピン	5.0	5.9	6.2	6.5	6.8	7.0		6.2	6.3
シンガポール	2.7	1.7	1.8	1.8	2.0	2.0	0.6	3.3	2.0
台湾	4.0	0.6	-0.8	-0.9	-0.3	0.7	2.1	3.9	0.7
タイ	3.0	2.7	2.9	2.8	3.2	3.5		0.9	2.8

(注) インドの年間成長率は会計年度(4～3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	16/03	16/04	16/05	16/06	16/07	16/08	16/09	2014	2015
	(%)							(%)	
先進国									
米国	5.0	5.0	4.7	4.9	4.9	4.9	5.0	6.2	5.3
日本	3.2	3.2	3.2	3.1	3.0	3.1	3.0	3.6	3.4
ユーロ圏	10.2	10.1	10.1	10.1	10.1	10.1		11.6	10.9
英国	5.1	5.0	4.9	4.9	4.9	4.9		6.3	5.4
豪州	5.7	5.7	5.7	5.8	5.7	5.7	5.6	6.1	6.1
カナダ	7.1	7.1	6.9	6.8	6.9	7.0	7.0	6.9	6.9
エマージングアジア									
中国	4.0			4.1				4.1	4.1
香港	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.2	3.3
インドネシア								5.8	6.0
韓国	3.8	3.7	3.7	3.6	3.6	3.8	4.0	3.5	3.6
マレーシア	3.5	3.5	3.4	3.4	3.5			2.9	3.2
フィリピン		6.1			5.4			6.8	6.3
シンガポール	1.9			2.1			2.1	2.0	1.9
台湾	3.9	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	3.9	4.0	3.8
タイ	1.0	1.0	1.2	1.0	1.0	0.9	0.9	0.8	0.9

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	16/04	16/05	16/06	16/07	16/08	16/09	16/10	2014	2015
	(前年比%)							(前年比%)	
先進国									
米国	1.1	1.0	1.0	0.8	1.1	1.5		1.6	0.1
日本	-0.3	-0.5	-0.4	-0.4	-0.5	-0.5		2.7	0.8
ユーロ圏	-0.2	-0.1	0.1	0.2	0.2	0.4	0.5	0.4	0.0
英国	0.3	0.3	0.5	0.6	0.6	1.0		1.5	0.0
豪州			1.0			1.3		2.5	1.5
カナダ	1.7	1.5	1.5	1.3	1.1	1.3		1.9	1.1
エマージングアジア									
中国	2.3	2.0	1.9	1.8	1.3	1.9		2.0	1.4
香港	2.7	2.6	2.4	2.3	4.3	2.7		4.4	3.0
インド	5.5	5.8	5.8	6.1	5.1	4.3		6.4	5.9
インドネシア	3.6	3.3	3.5	3.2	2.8	3.1		6.4	6.4
韓国	1.0	0.8	0.8	0.7	0.4	1.2	1.3	1.3	0.7
マレーシア	2.1	2.0	1.6	1.1	1.5	1.5		3.2	2.1
フィリピン	1.1	1.6	1.9	1.9	1.8	2.3		4.1	1.5
シンガポール	-0.5	-1.6	-0.7	-0.7	-0.3	-0.2		1.0	-0.5
台湾	1.9	1.2	0.9	1.2	0.6	0.3		1.2	-0.3
タイ	0.1	0.5	0.4	0.1	0.3	0.4		1.9	-0.9

(注) 豪州は四半期データ。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2014Q4	2015Q1	2015Q2	2015Q3	2015Q4	2016Q1	2016Q2	2014	2015
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-2.2	-2.3	-2.4	-2.5	-2.5	-2.6	-2.7	-2.3	-2.6
日本	0.8	1.8	2.4	2.9	3.3	3.6	3.8	0.8	3.3
ユーロ圏	2.4	2.6	2.9	3.1	3.1	3.1	3.3	2.5	3.2
英国	-4.7	-4.8	-5.0	-5.0	-5.4	-5.4	-5.7	-4.7	-5.4
豪州	-2.7	-3.4	-5.2	-4.8	-5.5	-3.6	-3.8	-3.0	-4.7
カナダ	-2.3	-2.6	-2.8	-3.1	-3.2	-3.1	-3.4	-2.3	-3.2
エマージングアジア									
中国	2.7	3.3	3.2	3.0	3.0	2.6	2.4	2.7	3.0
香港	1.3	1.3	2.6	3.1	3.1	3.8	4.3	1.3	3.1
インド	-1.4	-1.3	-1.3	-1.1	-1.1	-1.1	-0.8	-1.4	-1.1
インドネシア	-3.1	-3.0	-2.5	-2.2	-2.1	-2.1	-2.1	-3.1	-2.1
韓国	6.0	6.7	7.0	7.7	7.7	7.9	7.8	6.0	7.7
マレーシア	4.4	3.5	2.7	2.5	2.9	2.4	1.9	4.4	2.9
フィリピン	3.8	4.1	4.1	3.4	2.6	2.2	1.1	3.8	2.6
シンガポール	19.7	20.6	19.9	19.3	19.8	18.9	19.9	17.5	19.8
台湾	11.8	13.3	13.2	14.2	14.6	14.4	14.7	11.8	14.6
タイ	3.8	4.6	5.7	7.3	8.2	10.3	11.1	3.8	8.1

(注) インドの年間経常収支は会計年度(4～3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準 (%)	日付	(単位:bp)	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	0.25 - 0.50	引き締め: 2015/12/17	0.25 - 0.50	2015/12/17	25	2016/9/22	現状維持
日本	無担保コール翌日物金利	0.10	緩和: 2008/10/30	0.50	2010/10/5	0-10	2016/9/21	現状維持
ユーロ圏	主要リファイナンスオペ金利	0.00	緩和: 2011/11/3	1.50	2016/3/10	-5	2016/10/20	現状維持
英国	バンク・レート	0.25	緩和: 2007/12/6	5.75	2016/8/4	-25	2016/9/15	現状維持
豪州	キャッシュ・レート	1.50	緩和: 2011/11/1	4.75	2015/8/2	-25	2016/10/4	現状維持
カナダ	翌日物金利	0.50	緩和: 2015/7/15	1.00	2015/1/22	-25	2016/10/19	現状維持
エマージングアジア								
中国	1年物貸出基準金利	4.35	緩和: 2012/6/8	6.31	2015/8/25	-25	2015/10/23	-25bp
インド	翌日物レボ金利	6.25	緩和: 2015/1/15	8.00	2016/10/4	-25	2016/10/4	-25bp
インドネシア	7日物リバースレポレート	4.75	緩和: 2015/2/17	7.75	2016/10/20	-25	2016/10/20	-25bp
韓国	7日物レボ金利	1.25	緩和: 2012/7/12	3.00	2015/6/9	-25	2016/10/13	現状維持
マレーシア	翌日物金利	3.00	緩和: 2016/7/13	3.00	2016/7/13	-25	2016/9/7	現状維持
フィリピン	翌日物金利	3.00	緩和: 2016/5/16	3.00	2016/5/16	-100	2016/9/22	現状維持
タイ	翌日物レボ金利	1.50	緩和: 2011/11/30	3.50	2015/3/11	-25	2016/9/14	現状維持
ベトナム	リファイナンス金利	6.50	緩和: 2012/3/12	15.00	2014/3/17	-50	2014/12/23	現状維持

(注) インドネシア中銀は2016年8月19日に政策金利をBIレートから7日物リバースレポレートに変更

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行